2004915

絵本学会NEWS No.22

発行：絵本学会
発行日：2004年9月15日
編集：絵本学会事務局・広報委員会
事務局：〒305-8574茨城県つくば市天王台1-1-1
筑波大学芸術学系笹本研究室内
Fax.029-853-2846
http://ehongaku.musabi.ac.jp

絵本学会

2004年度第7回絵本学会大会・総会
寄稿「書評」にこたえる
絵本関係イベント・展覧会案内
事務局からのお知らせ
・2005年度大会
・研究助成再募集について
・『BOOK END』バックナンバーの販売
・名簿訂正
新入会員名簿

第7回絵本学会報告

第７回絵本学会大会実行委員　上出恵子

◆ 2004年6月12日（土）～13日（日）、長崎市の活水女子大学東山手キャンパスを会場として、第７回絵本学会大会が「絵本にできること―現在から未来へ―」をテーマに開催されました。活水学院創立１２５周年記念事業の一環でもある今大会は、活水女子大学にこの４月に開設された子ども学科の教職員を中心に、長崎県教育委員会、長崎県立長崎図書館、祈りの丘絵本美術館の関係者で実行委員会を結成し、その準備、運営にあたりました。大会直前に地元・佐世保で子どもをめぐる凄惨な事件が起こり、実行委員の中にはその対応を急遽迫られるものもおり、また時ならぬ台風の接近で悩まされることも多く、十分な準備もできないまま不安のうちに当日を迎えましたが、台風はそれて２日とも天候に恵まれ、また新聞報道などの効果もあってか受付人数２８８名という大勢の参加者で盛況のうちに無事終了できました。関係の方々、またボランティアとして手伝ってくれたおよそ７０人の学生の一人ひとりにも心から感謝いたします。

◆ 大会第１日目は、絵本学会の今井良朗会長の開会宣言につづき、活水女子大学の野々村昇学長の挨拶、そして今年から始まった他の学会との連携ということで日本マンガ学会の中尾ハジメ会長からのメッセージも紹介され、第７回絵本学会大会は始まりました。

◆ プログラムの最初は、「韓国の絵本事情」と題した講演で、韓国から絵本作家のイ・ホベックさんをお招きし、キム・ヨンスンさんの通訳で、活況を呈している韓国絵本の現状をお話ししていただきました。一緒に来日された奥様が絶妙のタイミングでＯＨＣを用い次々と紹介される絵本を見ながらイ・ホベックさんにうかがう話はとても分かりやすく、また絵本作家としてだけでなく、図書出版＜チュミマジュ＞の代表でもあるそのお話に会場は興味津々。韓国絵本の世界に刺激を受けると同時に、かつて日本で現在の絵本の基盤を築く数々の絵本が登場した時の熱気と爽やかさが思い起こされました。

◆ つづいてのシンポジウムは、大会テーマである「絵本にできること―現在から未来へ―」について、広松由希子さん（絵本コーディネーター）をコーディネーターとして内田麟太郎さん（絵本作家）、村中李衣さん（児童文学者）、今井良朗さん（絵本学会会長・武蔵野美術大学）が三者三様それぞれの立場からの絵本への思い、考えを語って下さいました。当然のように会場からの出た「佐世保事件のようなことがあると絵本に限界を感じませんか」との質問に、内田さんが「決して動じない」といいつつ、自身の体験を語って下さったのが印象的でした。今後に残したものは大きいシンポジウムだったように思えます。

◆ シンポジウムの後は作品発表で、これは今年から独立して行われることになりました。４人の方のそれぞれの作品について１５分ずつの発表をうかがった上で、鑑賞する時間も比較的ゆっくりとあり、好評でした。この作品発表に関して実行委員会として問題を感じたのは、作品の到着が非常に遅れたものがあったことです。とくに今回の会場校のように、このような展示に不慣れな場合、時間的なゆとりが必要なので、期限は守るようにしていただきたいと願っています。

◆ 第１日目の会場での最後は絵本学会2004年度総会でした。その終了後は場所を変えて、長崎港に停泊しているホテルシップヴィクトリア（元青函連絡船・大雪丸のホテル）にて、交流会をもちました。１００人近くの参加者にアトラクションとして太田大八さんの甥にあたる河野謙さんが指導する長崎大学の学生による本格的な蛇踊りの披露があり、そこに交流会の参加者も指導を受けて加わり、常にもまして盛り上がった会になりました。

◆ 大会第２日目は、９時５０分から３室に分かれての研究発表からですが、その前に学内のチャペルで礼拝がもたれました。日曜の午前中は聖日礼拝の時なので、学内を使用するときは礼拝をもつのが活水学院の慣わしであるからです。パイプオルガンの調べに朝から耳を傾け、心が洗われたという感想をいただきました。

◆ 研究発表は、Ａ室は三宅興子さんを司会に４テーマ、Ｂ室は佐々木宏子さんを司会に４テーマ、Ｃ室は石井光恵さんを司会に５テーマの発表があり、それぞれに充実したものでした。この研究発表に関しては部屋の割り振りが十分でなく、皆様にご迷惑をお掛けしたことをお詫びしないといけません。１００人以上の参加者があったＣ室が、１００人を切る１番小さな教室で、立ったまま発表を聞かれた方に申し訳なく思っております。

◆ 昼食・休憩をはさんで午後のプログラムの最初は「太田大八に聞く：なぜ絵本にこだわるか」で、太田大八さんのほとんどの原画を収蔵している祈りの丘絵本美術館館長の川端強さんが聞き手となって、８５歳の日本の絵本界の重鎮、といって軽やかでもとてもダンディーな太田大八さんの全貌に迫りました。

◆ 閉会式前、最後のプログラムは、２時間にわたるラウンドテーブル（分科会）で、Ｒ１「絵本作家研究・長谷川集平の世界」、Ｒ２「絵本受容研究・ブックスタート」、Ｒ３「絵本の国際交流アジアの絵本・韓国の絵本」でした。今大会の昨日からの熱気がそれぞれのＲＴに反映・集約され、２時間が長いと感じることなく過ぎました。Ｒ１では長崎在住の長谷川集平さんが自ら話題提供者となり、その創作の核心にふれる話を披瀝されただけでなく、最後にはもう一人の話題提供者鳥井新平さんとのライブもあり、分科会は大いにわきました。Ｒ２では長崎のブックスタートの現状を、長崎県立長崎図書館の協力を得て集計されたアンケート結果も資料として出され、司書の土井和香さん、保健師の谷口暁美さん、そしてＮＰＯ法人「ブックスタート」理事長の松居直さんが話題提供者となって、論議が深まりました。Ｒ３では昨日の講演者イ・ホベックさんと絵本学会の運営委員でもある佐々木宏子さんが昨日の講演をふまえながら、具体的にまた新たな視点で韓国の絵本をとりあげ、有意義な時間となりました。

◆ 大会関連展示として、会場で「太田大八の挿絵本」展を開催したほかに、祈りの丘絵本美術館で「太田大八・長谷川集平／長崎のふたり展」（６月９日～８月２９日）も、第７回絵本学会大会記念として開催されました。太田大八さんだけでなく、長谷川集平さんの原画をみる機会が今大会を契機に与えられたことは幸いだと思います。

◆ 今回は託児も実施しましたが、有資格者のもと保育士の勉強もしている子ども学科の学生に手伝ってもらいました。託児の申し込みは３名でしたが、学生たちにとっても良い機会ではなかったかと思っております。

◆ ブックフェアおよびサイン会も盛況でした。とくにイ・ホベックさんが送って下さった韓国の絵本は珍しく、瞬く間になくなってしまいました。絵本学会や日本マンガ学会の紀要、長崎のメトロ書店、祈りの丘絵本美術館の書籍販売だけでなく、大会２日目には長谷川集平さんのシューヘーガレージの書籍やグッズの販売もあり、参加された方々に喜ばれました。

◆ 大会を終えてみて、改めてたくさんの方たちによって支えられたものだったと痛感しています。終了後に朝日新聞（九州版）に今大会のことがまとめて紹介されました。その見出しは「開放感いっぱい　絵本学」。「即席ライブにサイン会も」「情報交換や交流の場に」とも紹介されているように、自由で開放的、しかも絵本への思いを深め、また確かなものとした大会になったことを、皆様にご報告するとともに、今大会を支えてくださった多くの方たちに心から感謝したいと思います。

講演「韓国の絵本事情」

講師：イ・ホベック（絵本作家）
通訳：キム・ヨンスン（梅花女子大学大学院）

始めまして、イ・ホベックです。第７回絵本学会に招待いただき、感謝を述べます。

大きく三つの話をします。

一つ目は現韓国の絵本業界の話、二つ目は私の絵本出版社であるジェミマジュウ出版から発行された絵本についての話、最後は私がどうして絵本を作ろうとしたかきっかけとなった話をします。

ではまず、最初の韓国の絵本業界の話です。韓国と日本との文化交流が活発になって日本の出版社から韓国の絵本が発行されたことは大変、意味のあるところだと思います。

しかし、韓国の絵本業界は昔から活発だったわけではありません。今までは世界名作物語や、ディズニー童話といった評判の高い童話が中心に出版されていました。そのことが変わってきたのがちょうど、９０年代に入ってからです。９０年代はちょうど、海外留学を終えた若い世代が帰国し始めた時代です。そのため、海外経験から家庭において幼児教育に対し高い関心がありました。その中で先進国のような幼児教育に対する対応の必要性を実感していました。そのため芸術性の高い絵本の必要性を望んでいました。出版業界も同じように視覚的な美しさや想像力の重要性が論議され出しました。西欧の先進国のような絵本をつくりたいと試行錯誤が始まりました。当時私はキルバッという出版グループでいろいろな企画を立てました。韓国のおもしろい文化を紹介するシリーズや民画を合わせ持った新しい絵本の分野を開拓しました。

しかし、サムソン文化財団の後援など受けましたが、イラストレーターの不足、ポップアート制作の開発など人材や技術面で韓国の現状を目の当たりにしました。幸い伝統文化シリーズは子どもたちに好評だったのですが、撮影の未熟さが相まって企画が埋もれてしまいました。当時の絵本業界のことを考えると出版に当たって投資をすることや商業的な戦略など、あまり研究がなされていませんでした。また、絵本は子どもの読み物であるという固定観念があり、市場の拡大が早急に必要でした。そのためにまず、会社自体で企画印刷、出版まで出来る会社が必要だと思い、約２年の実験期間の後、上質印刷紙を使い、発色の良いインクで多少経費はかかるものの、作家の意志が反映できる絵本作りに着手しました。

次にジェミマジュウ出版社の絵本の紹介や裏話についてお話しします。

「世界一強い雄鳥」という本があります。この本は私の家族の話です。父権のあった父親世代の人生を雄鳥の人生として絵本にしました。子どもたちにその時代の雄鳥の人生をどうしても話したかったのです。イラストとイメージが違い、力強い雄鳥はイラストレーターのイ・ホベックによっておもしろおかしいピカソのような絵になりました。私は作家にお願いして、力強い雄鳥と私の家族写真を入れてもらいました。作家が自由に制作した記念的な一冊です。

次に９７年に童話コンクールで優秀賞を取った「豹のまだら模様はどうやってできた」という本についてお話しします。この本は先の雄鳥の本と同時期に発行されました。彼は若い新人作家で、会社に直接、絵を持ってきたので印象に残ってます。当時私が興味を持っていたジャングルブックの作者を研究してはどうかと勧めました。

もう一人の作家は絵本のワークショップで会いました。彼の絵は文章がなく、非常にちょこまかしたかわいい絵を描く作家でしたので、すぐに私が文を当てて作った本がこの本です。題名は「ぽきぽき村のトッケビ」といいます。しかし、文章を考えるに当たってなかなかいい文章が出来ません。しかし、ある事件がきっかけとなり文章が出来ました。確か、午後1時ぐらいだったと思います。場所はソウルの地下鉄の中の話です。電車には大人ばかり１０名ぐらいしか乗っていませんでした。私は会社に向かう途中だったので憂鬱で、退屈な窓をながめていました。すると駅のホームが近づくに従って、そのホームから突然、幼稚園生が４０人ぐらい飛び乗ってきました。そうすると暗い電車の中が一瞬にして騒がしくなりました。これがヒントとなって話ができました。

また、市場を広げるために中学生向けの絵本を考えました。当時の学級文庫には分厚い本ばかり並んでいました。そこで短編の内容のある絵本を作ることを思い立ち、１２０ページもある本に対して、私たちは４８ページという本を作りました。これが評判が良く中学生のベストセラーになりました。

この「ママ、この服好き」という絵本は日常の子どもの視線に立ってリアルな子ども社会を絵本にしました。絵本の題材をどこから探すかは、作家の視点によって様々です。私はそこで中国吉林省延辺の朝鮮族の口伝えの民話を絵本

の題材に取り上げました。元老作家のクン・ソンチャン先生の力を借りて、私たち民族の持っているユーモアがあり、民族性豊かな作品を仕上げました。

また、新しい試みとして音楽と絵本をつなげる試行もやりました。５年の歳月をかけて完成した「黄色い傘」は私たちの誇りとなりました。海外からの評価も高く、反応も良かったです。そこで次にパンソリを入れた絵本を作りましたが、この本が全く売れなくて、結局パンソリの入った本とパンソリの入ってない本と二種類の本を発行しました。この１０年間に私の出版社から本を出した作家たちは評価も高く、出版業界でも人気と実力を兼ね備えています。作家たちの活動は止まることなく、すばらしい作品を作っています。これからも私たち出版社は新しい企画を続ける勇気さえあれば、次々と絵本を作ることのできる会社だと思います。以上のように作家の自主性を尊重すること、また、企画の斬新さ、そして何よりも読者の立場に立って考えるという三点を大切にしています。

次は私の絵本作りのきっかけとなった話です。私はソウルの美術大学に通っていました。当時の大学生の時は全く絵本に興味はありませんでした。しかし、一冊の本でそれは変わりました。その本がトミーワンゲラーのイラスト集です。この本のおかげでソウルのキョウボ文庫という本屋の外国書籍コーナーに行き、そこで絵本を何冊も買いました。チャールズキーピングもその当時知りました。妻の留学の関係からフランスに行き、子どもの一歳の誕生日に絵本のプレゼントをもらいました。子どもに読み聞かせをしているうちに絵本の魅力にとりつかれました。

帰国後、私が作った絵本に「ウサギのお留守番」という本があります。家のベランダでウサギを飼ってるんですが、私たちが留守にしているときにウサギの糞が部屋に落ちていました。そこで思いついたのがこの話です。ウサギの目は皆さん、知っていますか。横を向いていても私たちを観察しているんですよね。その話を子どもに話して、ストーリーは自信があったんですが、挿絵については少し不安でした。しかし、この本がフランス、台湾、イスラエルで翻訳版が出版されることを思うと絵についても自信が持てました。今はそのウサギの子どもが主人公になった「ウサギの脱出」という話を考えています。それから、韓国の民画や民族楽器の加耶琴を使った絵本も制作中です。前述した「黄色い傘」に続いて、さらに管弦楽を使ったり、伝統的なリズムに短歌を詠んだり、新しい構想で作品分野を広げています。私は、実力をつけて、勇気をさらに学び、夢に描いた本を一冊ずつ見ることを思うと胸がいっぱいになります。ここで私の講演ができる機会を作ってくれた絵本学会に感謝を述べます。皆さん、ご静聴ありがとうございました。（文責：波多野慎二）

シンポジウム
絵本にできること
―現在から未来へ―

シンポジスト：
内田麟太郎（絵本作家）
村中李衣（児童文学者）
今井良朗（武蔵野美術大学）
コーディネーター：
広松由希子（絵本コーディネーター）

広松　「絵本にできること」という大変大きくて捕らえどころのない、そして私たちを取り囲んでいる状況を考えると切実なテーマについて、今日お話ししていただく３人のパネリストの方を紹介します。
内田麟太郎さんは、案内では絵本作家となっていますが、ご自身では絵詞（えことば）作家とされ、「おれたちともだち」シリーズをはじめ絵本のための言葉を意識してかかれている数少ない作家です。ご自身の創作をふまえてその愉快な発想とか、絵本の言葉を通して絵本の本質に迫るお話を伺えるのではないかと思います。今井良朗さんは武蔵野美術大学の教授で、絵本学会の会長です。メディアとしての絵本という視点からのお話を伺えればと思います。村中李衣さんは小児病棟の子どもたちやお年寄りと長い間絵本の読みあいということをされていて、読書療法の可能性ということについて、そして絵本とこどもを取り巻く文化についても鋭い視点で本をお書きになるのでいつも目から鱗なのですが、そのような鋭い視点から今日もお話ししていただけるのではないかと思います。『おねいちゃん』『たまごやきとウィンナーと』など児童文学の創作も村中さんはされています。また梅光学院大学の教授でもあります。現場で実感されていることなどを今日はお聞きできるのではないかと楽しみです。
まず１５分以内でお話をうかがい、会場からも意見もお聞きしたいと思います。途中で１０分の休憩を取りますので、それぞれの先生に質問などお願いします。

◆ポアーンと浮かんでくるもの

内田　学会に呼んではならない人に飯野和好さんとか、荒井良二さん、内田麟太郎とかおりますが、その内田です。絵本の現在と未来ということですが、それは他の人に話して貰うことにして今日は内田麟太郎の現在と、内田麟太郎に未来はあるのかということでお話しします。
『ともだちや』を出してからいろんなところから講演依頼があるのですが、必ずこんな時代に友情の大切さをかいておられる内田先生に来ていただいて、子ども達にいかに友情が大切かを話して下さい、とあるんです。そうすると私

は、あ～あ、まただましちゃった、と思うわけです。
『ともだちや』が出て友情の本だといわれてますが、友情の本なんですよ。でもあまり考えないでかいている。例えば一番新しい『ありがとうともだち』は海が出てくる絵本です。絵描きはこんなものもかけるという欲望がある。で、今度は海。でも、「ともだちや」シリーズでは友情ははずせない。今朝ホテルの前の海に行ったところ、イカがおるんですよ。泳いでいる、いかにもいかがわしい。海だから海釣りだなあ、と考える。黒鯛釣り、キス釣り、アジ釣り、アナゴ釣りと考え・・・、しかし私の脳は動かない。ああ、海釣りか、海が釣れちゃった、と変に思うと私の脳は発動する。そこに友情をまぶしていく。ところが世間はまぶしたところをテーマというが、それは違います。その前の『ごめんねともだち』の時はキツネが泣いたらアリの上に涙が落ちる、そしてアリに謝る。オオカミが自分のことだと思って飛び出してくる。オオカミは馬鹿よね、と思った途端に私のうれし心が動く。それに友情をまぶす。このあたりを間違えないでほしい。友情はまぶしで基本は変です。考える人というのがロダンにある。私の考えるやり方というのは、部屋の中ではお茶を用意してなるべくボーッとする、限りなくボーッとする、大体は寝ます。人間の脳って面白い、寝ているのに朝になると起きる。脳のどこかがかすかに明日は７時に起きないと絵本学会に間に合わないよ、って言っている矢印が脳味噌の中にあるわけ。これがないとご永眠なさいましたになる、ずっと寝ちゃうわけです。私の中にもかすかに絵本を作らなくっちゃというのがある。あるんだけれどもそれを限りなく低くして寝ます。確率は低いんだけれど、こうやってポアーンといい加減なものが浮かんでくると嬉しくなる。長谷川集平さんの方はそうじゃない。私の方は限りなく限りなく、また寝ちゃったという具合で・・・。テーマに辿り着けるのでしょうか。そうですね。『うみのしっぽ』という私の最初のものがある。売れない作家は暇ばかりで、まじめな人は勉強します。私はこたつ布団で限りなくテレビを見ていた。「水戸黄門」の再放送とか。冬ですからこたつ布団があります。枕を２段積んで、ボーッとしているわけ。うちの奥さんは働きに出ているので、暮らしの憂いは私にはない。限りなく柔らかい暇と自由と少々の貧しさがある。それで、こたつ布団がああ波みたい。大体４０過ぎた男がこんなことを考えたらいけません。奥さんを働かせてね。ああ、こたつ布団て波みたい、そこまではありますよね。太田大八先生にも時たまあるかもしれません。でもその後、海のしっぽというのがひょっと出てくるんですよね。何故出てきたのかは私にも分からない。勝手に出てきた。暮らしの憂いはない。明日どこかに行かないといけないということもない。ただただ限りなく広い暇がある。そこに海のしっぽというのが浮かんできた。で、海のしっぽって何だろうと考えていたら、海に注いでいる川が山の方にいくにしたがってしっぽみたいということでかいたわけです。
まとめに入ります。子どもと老人は同じだといいます。長谷川さんみたいにまじめにやっている人は６０過ぎになったら大変。私のように限りなくいかに力を抜いていくかというタイプの作家にとってはこれからの老後は本当に実り豊かな、つまり未来が待っているわけです。老は童（わらべ）でもあるわけなので、これから昼寝をしていく創作方法で子どもも笑ってくれる作品がちらほらとかけるであろうというのが今日の結論です。
広松　限りない可能性が目の前に開けていくような大変豊かなお話でした。暇と変というキーワードが出てきたところで今井さんにお話を聞きたいと思います。

◆自由で柔軟で緩やかなメディア
今井　昨日打ち合わせをしましたが、内田さんが「いいよ明日は好きにしよう」ということになって、やはりポアーンだよ、で今日は内田さんの話からということだったのです。内田さんのポアーンを引き継いだ話をしていこうと思います。美大で学生を教えていて２０年くらい感じていることがあります。それは美大を目指している学生は絵やイメージや映像に強いと思っていますが、じつは映像音痴で、絵が読めない。何故かといえば言葉が駄目だからなのですが、イメージが読めるかどうかは言葉に関わっていると思っています。例えば内田さんのようにポアーンとかいているのを読む方が硬くなっている。読む方もポアーンとならないと見えてこないのにそうしない。描かせるといきなりかく。時間といったら時計を描いてきたりする。これはただの翻訳、置き換えということです。このようなことは１つの例ですが、現実にこういうことは多い。意外と我々も含めて表面的なところでイメージを読んでしまっている、それから言葉についても使ってしまう。そういうところを鍛えないと。
「きのう猫が死んだ」これだけでは概念的言葉で次に繋がらない。だけどその時に、「凄く可愛がっていた」「２０年可愛がっていた猫が、きのう死んだ」と言葉が出てくると感情が出てくる。自分の感情とか訴えが下手になってきていて、何か本を読む時にも構えて読んでしまう。自分の感情が入ってこない。そうすると内田さんのポアーンという発想が見えてこない、というようなところがありはしないだろうか。絵本とは自分の好き勝手に読める自由で緩やかでとんでもない柔軟なメディアなのに、どうしてこうしなければならない、としてしまうのだろうか。もっと自由に自分の身体が入り込んでいくように読めたらと思っています。
広松　イメージの貧困、言葉の貧困とかのお話だったと思います。記号化している陰に自由な自分が失われていると

いうこともありますが、続いて村中さんにお話をしていただきます。

◆<絵本の隙間>をめぐって・恍惚とした空間

村中　ここ２０年くらい０歳の赤ちゃんから１００歳を過ぎたおじいちゃん、おばあちゃんと絵本を１対１で読みあうことを続けていますが、その中で実感として感じていることがあります。それで学会や自分が研究している中で、こういうことが起こったのはどうしてかと解明していく方向にまなざしがゆくのですが、じつは何かが起こる、絵本と読み手の間で何かが起こる場合、こういうことを言うと子どもが思わぬことを言ったり歌ったり、面白がったりする反応を子どもって不思議ねと片づけてしまうわけですが、偶然ではない何かがキチンと絵本の中にある。それを感じることの方法論として、今学会や研究がもっている方法論だけでは無理ではないかと思っています。キーワードとして<絵本の隙間>というところから絵本の可能性を考えてみたい。隙間その１、その２で具体的にお話ししようと思います。

<隙間・その１>

昨日長崎に着きました。それで、時間の調整のために、ねえやの里帰りのような荷物を持って駅の近くのショッピングセンターに行きました。そこに無印のような服の売り場があって、異様な動きをしているお母さんがいたわけです。入り口にある、幅が１メートルくらいのディスプレーの空間に籐の椅子に座った人形があって、そこに子どもがいる。お母さんは子どもを出したいのだがお母さんは入れない。子どもは何を見るでもなくそこに住まわっている。この感じです。絵本を読む時、私たち読者は大方の場合、絵本の方、つまり店に入ったら奥に飾られている服を見て、値段を見てなわけです。そこに入り込んで絵本の中で恍惚とした空間を手に入れる、例えば『ちいさなジルはどこへいったの？』というのがありますよね。美術館の中に入っていく少女の話。病院で読みあいをしているとベッドの上にあらぬ方向を向いて、絵本を読んでいるとか読んでいないではなく、住んでしまっている。『すきですゴリラ』などを読んでいるとゴジラを見ているのではなく自分が住まわっている感じ。

◆<絵本の隙間>をめぐって・入れない物語との対話

<隙間・その２>

今のように絵本の中に住まわってあらぬ方向を見るのでもなく、感じているというのでもなく、例えば多くの読書運動とか今の教育関係の人とかは絵本と読み手が、子どもが強い親和性をもつことを良しとしている。私は絵本の前に佇んでその前に入れない読書を、その中に入れるのを拒むその佇みが見せてくれる大事なものもあると思う。エッツの『もりのなか』を見た時に、子ども達は好きですが、どう考えても、森の中で１列に並んでいる行列の後ろで、子どもの中に入ってドンジャラやっているということは絶対にないと思う。読んでいる子どもは入れない不思議な行列の中に、シーンとした静けさの中で、聞いている。音を聞いたり身体で感じるというのは同一化・体験することではないと思う。「ぼくがラッパを吹くと動物たちは手に持った楽器を鳴らしたり、吠えたり、叫んだり、にぎやかな行列の音が聞こえてきそうな森の中は、じっとしているだけではもったいない！　ときには自分たちで音を作って絵本を思いっきり遊びましょう。親子でも大勢でも楽しめます」と言われたりしているが、でも何故じっと見ているだけではもったいないのか。ハンカチ落としの衣擦れの音を聞いているような厳粛な時間というか、絵本が、いつまでも子ども達の五感が開かれるまで待てるという大きな意味があるという、そのようなものがあまりにも絵本に託しすぎるために、出来ることが逆に奪われてしまうということがあるのかもしれません。

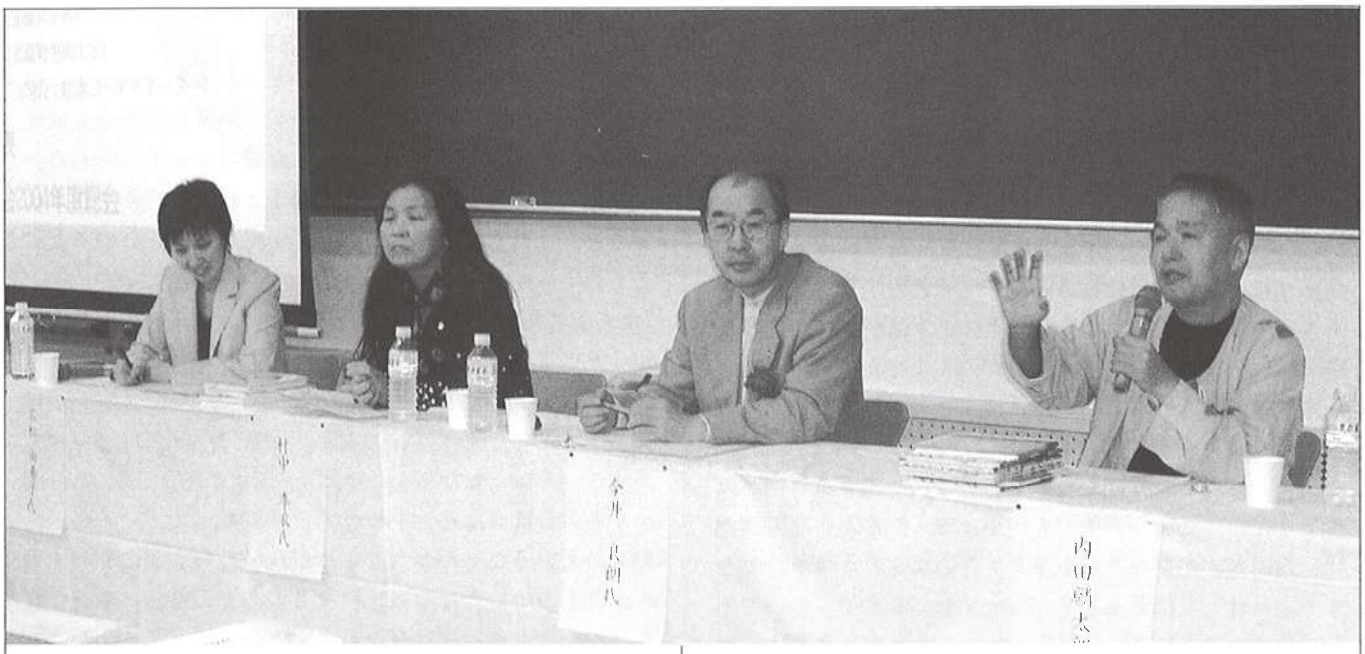
『なっちゃんのなつ』という私が昨年出た中で凄いなあと思ったのを紹介したいと思います。伊藤比呂美（ことば）、片山健（絵）で「かがくのとも」（０３年９月号）の１冊です。この作品にはなっちゃんという少女がお盆前の数日間、草いきれと虫たちのうごめきと風のながれと川のせせらぎ、そして死者達の弔いとか、むせかえるような風景の中で過ごす夏の日の様子が描かれている。なっちゃんとなっちゃんを取り巻く風景がもやもやとした感じで読み手の目の前に広がっていくのですが、でもその光景の中に読み手や子ども達が読みあっていて、決してその中に入りることが出来ない。読み手の五感を刺激して私たちの生きていることの毛穴みたいなのがゾワゾワと開いてくるのですが、それでもなっちゃんの傍にいて一緒に日差しを浴びているというのではない。作品の中のなっちゃんと呼びかけても絶対に聞こえないと思う。けれども、それが決してマイナスではないと思う。届かないが故に私たちは遠い記憶の中で、もしかしたらどこかＤＮＡの記憶の中でなっちゃんの一夏に立ち会っているような気になる。例えばちょっと音を、言葉を聞いてみて下さい。

「あしで　ふんでも　くずは　くすくす　わらいながら　すぐ　おきあがる」

ku（ク）の音が繰り返されるのを耳にとめながら、くぐもった何かくすぐったい感覚が立ち上ってきて、それが絵に表現された「くず」の蔓のように私たちの身体の芯に絡みついてくるような気がするんですね。例えばまた、

「かなむぐら　へそかずら　やぶがらし　かゆい　かゆいかに　さされた」

ここはka（カ）の音が繰り返されることに耐えながら言葉を受け止めるだけでも掻きむしりたくなるような焦燥感。



あらゆる生命達のざわめきの中で一人皮を掻きむしっている。お墓参りのシーンがあるんです。ここはちょっとミステリーです。

「ありが　たべてるよ　かに　くわれるよ　はんみょうが　ふりむたよ　めれた　いしだんに　とかげが　つるりと　かくれたよ」

とかいてある。「ありが　たべてるよ　かに　くわれるよ」というのは何でもないようですが、よく考えると不思議な感じがする。「ありが　たべてるよ」っていうのは誰っていうとなっちゃんが「あり」を見ているでしょ。なっちゃんかな、と思うんですが、ところが、なっちゃんの腕のあたりに「か」がいる。「ありが　たべてるよ　かに　くわれるよ」の「ありが　たべてるよ」がなっちゃんだとしたら、「かに　くわれるよ」って言っているのは誰。おばあちゃんは見ていない。ここで何か明らかにゾワゾワしたものがおこる。もっと不思議なのはそこに付け加えて「はんみょうが　ふりむたよ」というのがある。誰も振り向いていない、誰が見たの？ということになるのですが、振り向いた「はんみょう」の姿を捉えて言葉にしているのは誰なんだろうと思うと、理屈じゃなくて、まるでそれは言葉で語らぬ死者達の視線がこの絵の中から立ち上がってくる感じです。この語りに読者は寄り添えない。文章でいうと語りの視線がズレているなんていうこともできる。読者はこの語りに寄り添えないけれど、添えないが故に魂がスーッと抜かれて引き込まれそうな感じになる。子どもと一緒に読みあっていると、入り込めないため息が渦巻いている。自在に行き来する視線に支えられた本の隣にあることで、知らないで読者は自分自身を支えられているような深い安堵感と、一方落ち着きの悪さを同時に交錯しながら味わうことが出来るのではないでしょうか。この相反する２つのまなざしの間に挟まれる中で読者は佇む。だからもう一度いいますが、自在に行き来できる視線というのが絵と言葉によってつくられる、それと一方で、それは落ち着きの悪さでもある。何か意味というのを判断しようとすると。でもその間の中で読者が佇むことによってまるごと五感が開かれていくというふうに思う。このタイプの本に『だくちるだくちる』とか、『もりのなか』も同じ。入れない世界の物語と対話するという形があるのではないかと思う。絵本の可能性とは、分かりやすさ、親しみの方向へ引っ張っていくことではなくて、何か越えられない隙間みたいなものが、今日は＜隙間・その１＞、＜隙間・その２＞だったが、その３、その４と、本によって違うそのことを感じることがとても大事。その＜隙間＞2.5くらいの予感したものとして、今日、連れ合い（内田さんのことを冗談でこう呼んでいる）と一緒に祈りの丘絵本美術館に行きました。太田さんの原画を見た時に、ずっと視線を追っていくと揺れるような切ない感じに包まれてその前に立ちつくす。『バイルドライバー』の原画を見た時に、あの切ない思春期の時の前で視線を追っていると、このあたりの血管がドクドクとしてきた。それはあの中の主人公を一緒に感じあったりするものではない。大道（だいどう）あやさんの生命がむれていくようなそういうところにいくとまた違う風が吹いてきて、いつかこの風にのれるといいなあと思うが、今の私にはそこまでいけないという自分を確認できたりする。いろんな隙間が１つ１つの作品の中にあると思っています。

広松　絵本の可能性を考える上で、子どもと絵本、そしてそこに子どもと一緒に絵本を見る私たちのあり方みたいなものを考えさせられるような、隙間に関するお話だったと思います。隙間ということは内田さん、今井さんのお話にもあるようで、そこのところはいかがでしょう。

◆＜隙間＞と絵本の可能性

内田　隙間だらけの内田です。私の絵本に『ガタゴトガタゴト』というのがある。この間田舎に行ったら、弟がこれを見て「絵を描いた西村繁男さんが８で、兄ちゃんが２だ」という。先程、猫が死んだだけでは、という話が出たが、『ガタゴトガタゴト』は猫が死んじゃっただけで、こういうふうにというのは西村さんがしてくれた。私は「ガタゴトガタゴト」。私は詩人です。それで、私が絵本の文章を書く時に一番考えるのは、自分がみんな書かない。絵描きさんの隙間、スペースがある、遊ぶところのある文章の書き方を意識して書くわけ。例えば『ともだちや』ですが、友情が大切だというひたむきな思いで、つまり葉祥明さんのようにかいた場合、子どもが受け取ったかというと問題で、内田さんが変なことを考えて、心躍らせてワクワクして、これはもうほとんど子どもですね。それで、書いたから、絵描きさんのスペースもあって私のスペースもあって子ども達が遊べるスペースがあったのでないでしょうか。

今井　絵本の場合には絵と言葉が共鳴しあう部分がある。先程は言葉だけの話をして、言葉だけで猫が死んだというのでは記号にしかならない、だからそこにいろんな感情をつけていくという話をした。ところが、絵本の場合、修飾語、形容詞が少ない。「ガタゴトガタゴト」でいい。絵が物語ってくれる部分がある、さらには読者がそこに重ねていく部分がある。絵本は半分くらい作者で、あとの半分は読者が楽しまなくっちゃと思う。言葉とイメージのやり取りが絵本の中ではあって、それ全体として表現されているそのことを見る人は自分なりに感じ取って、その感じ取り方もいろいろあると思う。

最近テレビの見過ぎが子どもの言葉の発達に障害があるというのが学会で発表されて話題になっていたと思う。その先を見る必要もあって、言語の発達が阻害されるということはその先に何が来るかというとイメージを読みとる力が弱くなるということでもある。小説などの場合には行間を読むという言葉があったが、必ずそのように隙間は全部用意されているものなのに、その隙間が読めない。映像もそう。映像は動いているから一見分かった気がする。実際はそうではなくて、編集されているし、隙間を読むことになる。その面白さがある。ただ映像は退屈しないように作るため通常の５倍くらいに時間感覚がある。スピルバーグは７、８培、場合によれば１０倍くらいのテンポで作っていかないといけない作り方をしている。それでは映像の隙間を読むのは難しい。イメージを見ていくためのある程度のリテラシーがいろんなところで行われてもいいのではないかと思う。このような中で絵本はいい。絵本はいろいろい隙間を表現しているのだから、その隙間を読み解いていき自分なりに楽しむことが出来たら、行間を読んだり映像の隙間を読むことが困難になって来ている時にも良い読みとり方ができるのでは、と思っています。

村中　絵本の可能性のひとつに、ノドがあって閉じられているということ、めくる前のページがめくり終わると過去のページになるということ、どんな絵本でも閉じられるということ、そしてまた表紙を向けると新しい時間が生まれること、これらはとても大事なことだと思う。このことは多くの可能性を生んでいると思うのです。

『こちょこちょこちょ』（童心社）という内田麟太郎さんという人のものを読んでみたい。

「こんにちは／こちょ　こちょ　こちょ　さっちゃんはこちょこちょ　します／（略）／「ああ　たのしかった」さっちゃんは　ねむりました／「こちょこちょ　してよー」やまあらしは　はりを　ねかせています」

閉じるということが、もしこれが最後のページにもう１ページ具わっていたならば、何故この人をこちょこちょしてあげないで、何故縄跳びなんかするのと思う。これが表紙になることで、残念だったのね、今度こそ「やまあらし」はこちょこちょして貰えるかもしれない、と思ってまた見るんです。またこちょこちょ、こういう切ない男っているのよね、と思って閉じる。また今度こそかもしれない。これがもし紙芝居の最終ページだったらこんな切ない恋の物語ってないんですね。閉じられることによって明日はきっと、と思わせる。さっちゃんのこちょこちょこちょというざわつく感じがあって、また収まりどころの悪いところがまたいい、そして閉じた時にまたこうなるというのが絵本の面白いところで、子どもと読まないと気づかなかったところです。絵本の隙間という目線でみると裏表紙にかいてあるもの、ある意味ぱっと切り離した感じがまた次に繋がることもあるのだという例としてお話ししました。

広松　大人だけの目で見たらなんか完結しない居心地の悪いものが、絵本ならではの隙間が絵本をふくらませることになるのだという感じを受けました。ここで１０分間の休憩をとり、その間に質問の用紙を回収します。

◆声色について（会場からの質問）

広松　質問の中からいくつかピックアップして、そこから話をふくらませていこうと思います。内田さんに質問です。作品をつくる立場からすると、読み手が独自に声色を使う、リズムを変えることにことについてどう思いますか。

内田　連れ合いが読んだことだから、ここで気持ちが悪かったと本当のことをいえば大変。聞いたら盗んだわけではなくお金を払って買ったことだから、私は何とも思わない。ものとして出されたわけだから、その人の勝手だと思う。それに自分の考えたイメージそのままというのはない、どこかでズレてます。そのズレかたが、さっきのように気持ち悪いということもありますが、私は人間が緩やかですし、許容範囲に入る、大体入りますよ。

村中　声色という言葉自体がもっている問題もあると思う。正直な話、どんなくすぐったさが皆と一緒に作れるかと思って『こちょこちょこちょ』を読んだのですが、会場は冷ややかで、そうすると一人の芸になって陳腐なものになってしまう。でも、声を出している時は多分皆同じで、今日のさっちゃんの空気・場所を探しながら読んでいく。１ページめくるごとに新しい時間の中を生き直そうとする、声色ではなく作品の中の声を聞くということで。皆、聴力が違うし、感覚も違うから出てくる声は違う。声を出しているのは自分だが、作っている空気は一緒に作っているので、そこで作っているものを瞬時に耳を通して感じている。書いてあるものをその通りに読みなさいといっても、その通りとは何か分からないというのはある。どういうふうに読めばいいのか、工夫はというが、まさしく五感を開いて、でも相手とかみ合わない時もあって、でもかみ合わなさを感じながら本当のピッタリはどこかと探していくのも楽しみではないでしょうか。

広松　今のお話は、子どもに読み聞かせをする時どう工夫したらということの答えにもなるのかもしれません。次のはちょっと重い問題ですが、佐世保事件のようなことがあると絵本の力の限界を感じますか、という質問です。

◆佐世保事件と絵本について（会場からの質問）

内田　私は事件ではなく事故と思っている。子どもなのでいろんなことを考えてやったわけではなく事故であると思う。免許なくバイクに乗っちゃった、では殺された女の子の方はどうなるのかということはあるが、携帯電話で話し中でも事故もあるわけで事件ではなく事故と思っている。そこで、無力を感じないかといえば、感じない。自分の絵本が役に立っているかといえばそれも感じない。結びつける必要はないと思っている。目の前で１００人死のうが、１０００人死のうが自分の絵本の無力を感じる必要はないと思う。またそれに力があったとも思いません。もっと絵本は違う時間帯で皆の心の中に住んでいくものではないか、何かに対して有効性というのがすぐに分かるかも疑問です。昔から左翼文学をやっていたから言いますが、革命に役立つ文学という言い方があるんです。しかし、芸術の時間と政治の有効性の時間は全く違う。今度のを政治といっていいか知らないが、違う。私たちの文明はどんどん発達するが、心の置き所、ものを作る態度において携帯電話やテレビみたいになってきたかというと、それは違う。私は限界を感じないかというと感じない。また私は力も持っていない。私の言いたいのは「ガタゴトガタゴト」です。「こちょこちょ」です。どう緩やかに子ども達の所に下りていって、ということだと思います。はっきり言って、そういう言葉に内田麟太郎はたじろがない、ということになると思います。

今井　難しいことだと思うが、絵本と直接結びつくことではないということでは同じだと思います。こういう事件が起こると必ずそれがピックアップされるが、今の時代に直接それが極めて特殊か、増えてきたかというと必ずしもそうでもない気もする。私の好きな言葉に、関係づけるというのがある。ものごとを関係づけないと何も繋がらない。例えば、コミュニケーションの空間は広がっている、でも実際に一方に時間というものはなくしているのかもしれない。時間をなくしていく関係の中で何が問題かというと、まさに先の繋がっていく関係、もう１つは違い、差異が大事で、一人ひとりの人間は違うし差異があるということである。差異をもっと認識するとそこで自分が見つめられるし、他人との違いも分かるし、結果的に全体の中で、自分の個性もあるというようにキチンと出来上がっていく。そういうふうに考えると、今でもごっこ遊びがあるが、遊びの原点であると思う。それは言葉で繋がっていく、繋いで遊んでいく、無言のごっこ遊びはない。いろんなものを繋いで、自分なりの小さな空間の中で、自分がどんなふうに生きているのかを考えている気がする。ごっこ遊び的な要素、ものごとを関係づけていけるような状況が困難になっているのではないか。絵本とは限らずこういうことを考えていけばいろんな問題点を乗り越えていけるのでは。１つのものごとを取りあげて時代があまりにも荒んでいると決めつけることもない気がする。

村中　こういう事件があった時に絵本は何が出来るのかって考えることが、絵本というものと子どもに対して浅い呼吸を強いることになるのでは、ということが今日言っていることに繋がっていると思う。前に朝日新聞の夕刊に、金原瑞人さんが子ども時代が馴染む人と馴染まない人がいるというのを言っていて、自分にとって子ども時代は苦痛だったと言われていました。彼がいう子ども時代とは、行き着く先が見あたらず、茫漠とした絶望感、生きていることの濃密さが息苦しかったり、漠然とした死の恐怖というものが排除されて、先程から言っている浅い呼吸が強いられる大人好みの子どもが作られる括弧付きの「子ども時代」というならば、それが馴染まない子どもが多分いるだろうと思う。その時にさっきから言うように、本に子どもを呼び込んで、こっちの方に、店に入ったら商品の方へと強いることが子ども達を息苦しくしないかと思う。こういう問いかけは大事である反面、我々は何を大事にするかということも見極めていかなければならないと思っています。

広松　「絵本にできること」ということについて、絵本ならではの力というものを安易に絵本が万能なもののように考えると大変窮屈なものになってしまうのではないかと思いました。続いて、今の子ども時代の話から子ども時代はどうでしたか、との質問にお答え下さいませんか。

◆子ども時代を振り返って（会場からの質問）

内田　今度、『おかあさんになるってどんなこと』をＰＨＰから出しました。１８日か１９日頃に書店に出ると思います。４歳の時に母親が亡くなって、小学校に上がってすぐに、親父が再婚して、母親が子どもを二人連れてくる。前のが二人いる。その母親が私を徹底して愛さなかった、差別したんですね。それで子ども時代というのは、家出と万引きと一人でザリガニ釣りと・・・。佐世保の子どもというが、小学校の時から私は、こいつを殺してやるって生きてきた。母親じゃなくて、こいつですよ。１９の時に母親を追いつめて母親は身を隠して、私もボロボロになって東京に出てきた。どうして、人を殺す、母親を殺すということを乗り越えて生きていくのか、人間の宿題として乗り越えていくのかというのがずっとあって緩やかにやっていった。これは頭が分かっても駄目で心が納得しないと駄目な問題です。

『さかさまライオン』で絵本にっぽん賞をいただいた。ほとんど長さんの力でしたが、それでこの世界に入ったので、最初生活保護を受けていて出口がなかった。親父が気にしていてその親父が死んだあとの賞で、田舎に電話したら、お父さんが生きていたら、とおふくろが電話口で泣くわけ。ああ、終わったなあと思った。そしたら、子ども時代の夢を見て、醒めて泣きやむことが出来ない。それまで子ども時代は押しつけていて夢に見なかった。泣くのは何年間か続きました。でも気持ちよかった。本は長さんの緑色のグラデーションがきれいで、大きなゾウと影のライオンが遊んでいる、俺のおふくろは私の上に乗っかかっているゾウみたいなもので、それで、緩やかに越えていった。私が５０くらいの時に福岡（田舎）に行ってたまたま二人っきりの時に、母親が麟ちゃん愛せなくってごめんね、もういいよ、といったわけです。すぐ死にたがる、愛されなかった子はそうなる。生涯かけないだろうと思っていたことを言葉を通して、子どもにとって一番必要なことは、抱きしめて貰うこと、名前を言って貰うこと、心配して貰うことというのをかいたのが『おかさんになるってどんなこと』なんです。こういうのをバネにして、もしかするとユーモアの方にいったのかもしれない。こういう子ども時代があって昼寝大好きな内田さんがいる。繋がらないけど、繋げて貰えると有難いです。

今井　別に語ることはないですが、絵本のことだけで言えば、何故かカタカナばかりの絵本、時には戦中のいかにもというカタカナばかりの絵本を読んだ記憶があります。その頃の記憶が鮮明で、３、４歳、５歳の頃に読んだ絵本は記憶に残っています。母親の愛情を感じて育ったのですが、ただなかなかおねしょがなおらなかった。人より長めで、それがコンプレックスで、親は気にしないが子どもの方はコンプレックスをもっている。これが自分の生き方と関係しているようで、何か乗り越えないといけないという生き方になってきている、そんなもんですね。

村中　私は２７回も引っ越しして山口に戻ってきたのですが、あまりにも父の仕事が引っ越しが多いので、母方の家に母と二人で居候していました。そこがものを作るところで、カステラ屋でした。子どもながら何か役に立つことをしないとそこにいることが肯定されないと思って、陳列のガラスを磨いたらと工夫して、唾をペッペッとやるとピカピカになっている感じがして、夜、木戸を閉めて、その間から月の光がきれいで、ペッペッとしてこれでばっちりだと思っていると、朝、ガラスは曇っているし、唾臭い。誰の仕業かといわれたりして。光とか薄暗いもの、五感を起こすものが凄くあって、それは誰かに与えられたものではなく、一人の時間の中でだった。一人であることを貰えたその時が一番よかった。絵本に関わるようになるのは、絵本を買って貰うようなことはなくて、近所に貸本屋があって３時になると貸本屋に行ってマンガを読みあさったのが子ども時代で、大学時代です。筑波大学に本屋（丸善）があって、そこで初めて見たのが『１００万回生きたねこ』だった。ショックで、それは絵本とは親切に語りかけてくるものと思っていたら、どうでもいいわとはねつけられた感じでした。白いネコとトラネコで、トラネコにとってしか必要のない白いネコと白いネコにとってトラネコが必要、それを見ても見なくてもこの世界は変わらないというのに出会った時に凄く欲しくなって、丸善から出る時に窓から落としました。そうしたら白いネコが真っ黒になって。筑波大の関係者の方、ごめんなさい。それが絵本が子どもに与えられるものというものから変わった転機でした。

◆ポアーンと赤ちゃんについて（会場からの質問）

広松　最後の質問は少し補足していただいてから、とうことで、絵を読む意味、言葉の世界、他人の作ったものに早く取り込まれるという質問の意味の補足を、佐々木宏子さんにお願いします。

佐々木　言葉がイメージを繋いでいくということで、絵本に入っていく時に意味の世界に早く入っていこうとする。言葉というものが間に入ってくる、言葉と意味の世界に入ることは既存の意味の体系に入っていくことである。声色である程度取り込むことを考えた時にポアーンというのは言葉でも説明できないし、隙間でもないだろうし・・・。ポアーンというものは長さんの世界にもあるし、赤ちゃんは好き。赤ちゃんは意味の世界に入っていくというように絵本と結びつけるが、全然違う入り方をする赤ちゃんが沢山いて、そのポアーンをつかんでしまう。それをどう見たら、受け止めたらいいのか、そのあたりどうでしょうか。

内田　ポアーンが説明できれば学者になるんですが、長新太論で、堀内誠一さんのが今まで書かれたので一番納得し

ています。それは長新太は子どもの生理にまで届くというもので、あの絵の描き方、発想の仕方は、子どもの生理にまで届けようと思ってないと出来ない仕事ではないかと思っています。私はそこまで深く考えているかは別で、要はここにある子どもの生理に届く何ものかを発想全体の中で自分がこれをかこうと思ったと時、感じた時に、自分が書きたくなる。何かポアーン、これ以上はまとまらない。

今井　意味に取り込まれていくというのはやはりそう、これは大学生でも同じで、さっきも言ったように何か描かなくちゃならない、言葉でも絵でもそうだが、わざわざ意味に戻って、それを絵や言葉でかこうとする。時には日常のメディアでいわれている、起こっていることも１つの意味として、それに捕らわれた状態で自分も言葉を発していくことが多分にある。先程のポアーンだが、その実践をしたことがあります。今そうしたら多分家から追い出されると思うが、学生の頃、アパートを借りて１週間雨戸を閉め切り、新聞も見ない、ラジオをも聞かない、時計も止める、枕元に読みたい本を１０冊とノート。そしてひたすらボーッと過ごす。何か浮かんだらノートを書き始める、絵を描く、本を読みたければ読む。そうするとポアーンだが、頭が冴えてくるし、その時に見えてくるものは意味を越えた何か、それを感じることが出来る。もう少し違う言い方をすれば、例えば、バシュラールの『蝋燭の焔』というとても好きな本があります。バシュラールは科学者ですが、蝋燭の焔を見続けてそこから浮かんでくる言葉をひたすら書き続けているという本で、こういうものと繋がっている。内田さんは先程からポアーンとそういうことをいわれているが、じつは奥深い。そういう奥深いことを軽く言ってしまえる内田さんは凄い。それで、そういうのを実践していこうと思えば、自分なりの方向を見つけるしかない。自分なりにポアーンとして、一方その向こう側にあるものに集中力を向けていけると面白いと思っています。

◆まとめ・絵本学会の役割

村中　直接の応答になるかどうか分かりませんが、２つある。１つは隙間というのは内田さんのポアーンでもないし、今井さんのとも違う。それは何かというと私たちが解明しようとする時に分析するものではない形で、偶然ではない何かが必ずあると思う。理由はあると思う。でもその理由は一言でいえるものではない。そのことで考えると明日の研究発表で赤ちゃん絵本のことをしますが、赤ちゃんというのは、月齢でみた場合完全に意味の世界に取り込まれてもＯＫの臨界期がある。その前は取り込まれない。そこのところをキチンとみたいと思う。例えば、谷川俊太郎さんの鳴り物入りで出た『まり』と『にゅるぺろりん』と『んぐまーま』があります。谷川さんの言葉に長新太さんと広瀬弦さん、大竹伸朗さんです。この絵本は赤ちゃんの生理にピッタリという書評を見ますが、本当かと思っています。それはそうである時期とそうでない時期がある。例えば、長さんの絵本は大方において好きですが、「にゅるにゅるにゅるにゅわん」「にゅるにゅるにゅるにゅるにゅよーん」というので、赤ちゃんは寝ます。それは当たり前で、赤ちゃんを刺激しない音と絵だからです。しかし、いつもそうかというと違う。細かく見ていって、だからこうだと言うのではなく、いっぱいまだまだ見ていかないといけないものがある。あるんだが、それが一方向で切り口ですということにならないということを言っておきたい。いろんな切り口があって、もう少し詳しくみていきたいということで、だから絵本学会があると思うんです。詳しくという意味が１つの方向を掘り下げるだけではなく、いろんな方向から見ることで、照らしたいということではないかと思っています。全部長さんの絵が子どもの生理に訴えるというようには思ってない。多くそうだけれども、その多くの場合は何なのかをもう一回見ていきたい。私は内田さんとは違うのでポアーンという言葉ではなく、自分の中では裂け目みたいなもの、隙間というと余白とか言葉の少なさと思われるが、意味で絡め取られたものの中で割れ目、裂け目、裂けているものがある。こういうことを絵本学会で考えてきたいと思っています。

広松　まとめていただき、有難うございました。１つの方向ではなく、それぞれの現場に持ち帰って絵本にできるということをお互い刺激を受けながら、いろんな面をもつことで、子どもの生理に届く、生理まで届けようと、気負いなく生理まで届く本はどんなものかを考えてみたいと思います。いろいろな課題というかヒントが与えられたのではないでしょうか。皆さん、今日は有難うございました。

作品発表

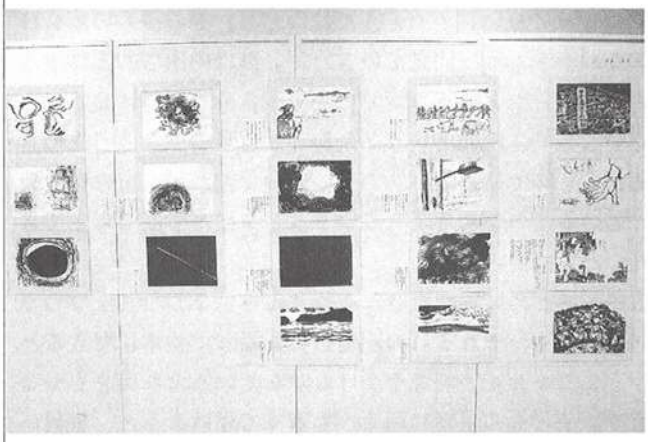
司会：加持ゆか

●『甲子園浜島物語』
東山直美（美遊空間主宰）

●『ハンと走獣たち』
加納潤子（筑波大学大学院在学）

●『ポストじまいの日』
佐野由美子（筑波大学芸術専門学群在学）

●『十月草』
宮崎詞美（京都市立芸術大学大学院在学）



研究発表

■Ａ室　司会：三宅興子

●ヴィクトリア時代の絵本
ー絵本におけるカラー印刷の始まりと
エドマンド・エヴァンズの初期の実験ー
正置友子（梅花女子大学非常勤講師）

〈発表要旨〉

イギリスの絵本の歴史は、カラー印刷の歴史とともにある。絵本の歴史を語るとき、ヴィクトリア時代に登場したエドマンド・エヴァンズ(1826-1905)を抜きにして語ることはできない。「エヴァンズ・レジェンド」ともいえるこの通説は、常に三人の画家（ウォルター・クレイン、ケート・グリーナウェイ、ランドルフ・コルデコット）とともに語られ、現代の絵本への画期的な業績として絵本史の中で位置付けられてきた。しかしながら、エヴァンズの絵本製作も突如として成功したわけではなく、そこに至るまでのカラー印刷技術者たちの、そしてエヴァンズ自身の苦闘の歴史がある。

子どもの本における初めてのカラー印刷は、1835年にダートンによって出版されたTales for BoysとTales for Girlsに挿入された口絵であるとされている。これはイギリスにおけるカラー印刷の創始者ジョージ・バクスター(1804-1867)によって独自の方法でカラー印刷されている。この頃より、印刷技術者たちは、より優れていて、より安価なカラー印刷に向けて鎬を削る競争を展開する。最初のカラー印刷による絵本は、1855年にダートン出版社から出された『ダートンの動物アルファベット』ではないかとされている。ハリソン・ウイア(1826-1895)が絵を描き、ジョージ・カーギル・レイトン(1826-1895)によって木口木版で印刷されている。この二人はバクスターの印刷工房に弟子入り以来の友人で、印刷技術を体得している画家と印刷技術者のコンビは、後の名コンビ、画家バーケット・フォスター(1825-1899）と印刷技術者エヴァンズを想起させる。二人はランデルズ印刷工房での弟子入り以来の終生の友人である。白黒印刷の訓練を受けたエヴァンズが、カラー印刷を手がけ、コストの高いカラー印刷に成功する一方で、安価なカラー印刷の成立に向けて、実験と出版を重ね、イギリス最初の絵本作家ともいえるチャールズ・ヘンリー・ベネット(1829-1867)とのコラボレーションに至る。このコンビによる仕事は、結果としては不成功に終わったが、この後のクレインとの新たな実験へのステップになった。

今回の発表は、絵本至上でも重要なヴィクトリア時代の中でも、その初期に焦点をあて、カラー印刷の始まりから、エヴァンズとベネットのカラー印刷による絵本製作の過程までを辿る。

●大正期における一少年の絵雑誌コレクション
ー札幌市中央図書館所蔵「池田コレクション」の絵雑誌、その概要と意義ー

丸尾美保・相川美恵子・石川晴子・大橋眞由美・香曽我部秀幸・窪田美鈴・正置友子・三宅興子

大正時代に札幌に暮らしていた一少年の絵本および絵雑誌のコレクション（池田コレクション）の内、絵本については『絵本学』No.6(2004.3)にその概要を発表している。今回は絵雑誌をとりあげる。池田コレクションの絵雑誌は、一番古い1915年8月の『日本の子供』から、一番新しい『児童画報』の19年12月号まで、4年半の間に『子供之友』、『日本幼年』、『トモダチ』、『コドモ』など、20種類、183冊が数えられる。その中には他の図書館等の所蔵が確認されない巻号も見られ、これだけまとまった数が存在していること、また当時楽しんだ個人の所蔵がそのまま保存されていることなど注目に値する。

これらを分析するにあたって、まず表紙に着目すると、当初は個々の雑誌毎に特色を持っていた表現が、やがて「可愛い」少年・少女の顔を描いたものが主流となり、個性が薄れていった。内容としては、総花的ないわゆる「幕の内弁当」方式のものがほとんどで、絵に力を注いだフルカラー頁と2、3色刷りの頁が組み合わさっており、季節感、遊び、行事、幼年読み物、知識、クイズ、マンガなどを数頁ずつ取り合わせたものであった。

もう一つの大きな特徴は、「しかけ」である。「しかけ」の多くは観音開きであるが、その変化形が数々あり、雑誌間で新機軸を競い合う様が読みとれる。定価が12銭前後という制約の中で、ポップアップ、水ぬり絵などを含めた多くのしかけが試みられており、工夫開発競争は熾烈であったと思われる。

当時倉橋惣三は、改良すべき点が多いと絵本雑誌を批判しているが、池田コレクションの絵雑誌に今も残る持ち主の少年の遊んだ形跡を見ると、読者にとって絵雑誌が毎月の楽しみであったことは疑いない。

大正4年から8年に出版された池田コレクションの絵雑誌群は、進展していくカラー印刷技術を取り入れて、視覚表現で子どもを楽しませようとする娯楽性に富んでいた。次に登場してくる「コドモノクニ」や「キンダーブック」に結実する芸術性や教養性などの萌芽を内包している点においても、資料的価値が認められると考える。

●占領検閲下の桃太郎絵本
ープランゲ文庫所蔵絵本を中心にー

谷暁子（北星学園大学文学部）

昔話のなかで最もよく知られている桃太郎は、絵本化されることも多かったといえよう。また桃太郎が時代に翻弄されてきた昔話であることも、これまで指摘されてきたことである。戦中、軍国主義の担い手とされた桃太郎は、戦後の児童書から姿を消し、桃太郎が登場するのは1950年以降ではないかと言われてきた。

実際にはどうだったのだろうか。英国・メリーランド大学プランゲ文庫所蔵の桃太郎絵本を中心に、占領検閲下で刊行された桃太郎絵本について考察したい。この期の桃太郎絵本を検証することは、空白期といわれてきた占領期の絵本研究、ひいては絵本史研究にとっても意義あることと思えるからである。

プランゲ文庫に所蔵されている桃太郎絵本は29タイトルで、GHQによる出版物検閲(1945～1949)を受けたものである。占領検閲下で刊行された桃太郎絵本の実体に迫るため、次の点からアプローチしたい。

(1)占領検閲下で刊行された桃太郎絵本の概要を把握するため、プランゲ文庫所蔵の桃太郎絵本について書誌情報、検閲情報などをまとめてみること。

(2)これらの桃太郎絵本は、いわゆる「赤本絵本」といわれる絵本である。絵本の絵や文などの特徴を掴むこと。同時にこの時期に刊行された背景などについても考えてみること。

●「詩とメルヘン」の30年

柴村紀代（藤女子大学・札幌市中央図書館えほん研究会）
篠宮裕子（札幌市中央図書館えほん研究会）

「詩とメルヘン」は、1973年4月、やなせたかしによって、創刊された。（創刊号はA4判、48頁、定価300円（株）サンリオ）創刊号は詩の同人誌や個人詩集から詩やメルヘンを集め、やなせたかしがイラストを描いたが、2号から東君平が参加し、1972年の臨時増刊号の時から、味戸ケイコがリリックな抒情画の描き手として登場することで、「詩とメルヘン」が、単にやなせたかしの趣味的雑誌から、抒情性の強いイラストから漫画までと幅広い雑誌に発展した。創刊号はよく売れ、5刷りの増刷をしたという。時代はようやく絵本やイラストへの関心を見せだし、絵本研究誌「月刊 絵本」が1973年5月に盛光社から刊行。1979年7月終刊まで全74冊、別冊8冊が出た。「詩とメルヘン」に刺激されるように、1979年1月15日、玄光社から「イラストレーション」が季刊雑誌として創刊（現在は隔月刊）。「月刊MOE」は、1982年11月1日白泉社から創刊された。これら3誌は互いに影響しあいながら、独自の路線を進み、3誌のイラストレーションコンテストは、プロのイラストレーターの登竜門として、一定の役割を果たした。また、若いイラストレーターの活躍の場としても機能した。東君平は1986年10月急逝まで「くんぺい魔法ばなし」の連載を毎号執筆した。味戸ケイコは、「詩とメルヘン」で安房直子のメルヘンにイラストを描き、以後、両者のコンビが誕生する。サンリオ美術賞を受賞した画家たちは、味戸ケイコ、葉祥明、林静一、東逸子、永田萌、黒井健、東君平、宇野亜喜良、いもとようこらである。他に上野紀子、杉浦範茂、かすや昌宏、飯野和好、スズキコージ、広野多珂子など、多くのイラストレーターが描いてきた。「詩とメルヘン」は、2003年8月号（通巻385号）で休刊した。「詩とメルヘン」の30年を通観することで、抒情画の伝統がどのように受け継がれ、また、「詩とメルヘン」が、絵本画家に及ぼした影響について考察したい。

■B室　司会：佐々木宏子

●赤ちゃん絵本に内包されるいくつかの問題点について(1)
岩崎真理子（日本児童教育専門学校）

●赤ちゃん絵本に内包されるいくつかの問題点について(2)
高橋久子（梅光学院大学）

ここ数年、赤ちゃんと絵本との関係の重要性があちこちで叫ばれている。ブックスタート運動もそれらに拍車をかけているが、果たして、それらの動きの根幹に「赤ちゃん」という存在への正しい認識があるかどうかは、疑問である。月齢によって外界世界との交信のしかたは刻々と異なっているし、そこに母親をはじめとする他者が介在する意味も、当然異なっている。しかしながら、量産されるいわゆる「赤ちゃん絵本」には、その対応がきちんとなされていないものが多い。

今回は、「赤ちゃん絵本」と称される数冊の絵本を対象に、それらの絵本が導きだす赤ちゃんにとっての「交信の要素」を分析してみる。その結果から「絵本」でなくてはできないことと、絵本でもできること、そして、できれば絵本よりもさらにのぞまれるコミュニケーションのかたちがあるのかないのか、そのあたりのことを考えていきたい。一応、生後3ヶ月くらいから生後7、8ヶ月くらいまで、生後7、8ヶ月くらいから生後1歳3ヶ月くらいまで、1歳3ヶ月から2歳くらいまで、というようにおおまかな区分をして、その時期の絵本との関わりを捉えてみることにした。

●幼稚園の絵本クラブにおける韓国絵本のよまれ方
金永順（梅花女子大学大学院在学）

梅花幼稚園絵本クラブ「こうめ文庫」が2003年で10周年を迎えたことを機に、梅花女子大学絵本研究会では、これまでの記録や活動内容をいくつかの視点で見直した。園児3年間の絵本との関わり方の変化、文庫のおはなしプログラムの変遷、体の絵本、こわい絵本、地味に好まれ続ける絵本、大人と子どものズレの問題等の視点があがっている。そのなかで、韓国人留学生である発表者は韓国の絵本の受け入れられ方をみてみた。

発表者がこうめ文庫に参加したのは1999年で、10年のうち後半5年の参加となる。1999年当時、こうめ文庫の蔵書に韓国の絵本は1冊もなかったが、ちょうど韓国の絵本出版が活発になってきた時期とも重なり、5年間で徐々に増やしていき現在で11冊の蔵書がある。この11冊には、日本で翻訳出版され、蔵書に入れたのもあれば、発表者がいるということで、こうめ文庫にだけある絵本が存在している。そのなかで、昔話絵本の『アズキがゆばあさんとトラ』と『パンチョギ』は、トラや民族衣装を着ている主人公たちが全面に描かれている。発表者は自分が韓国人であることから、「韓国の絵本」として認識してこれらの絵本を取り上げることが多い。しかし、幼稚園児達は「韓国の絵本」として認識するより以前に、その本がおもしろいかどうか、身近な関心につながるかどうかが重要であり、視覚的表現によって触発された好奇心は話の内容へとつながり、その世界ごと楽しんでいるように思われた。

特に子ども達に受け入れられたのが、『アズキがゆばあさんとトラ』『パンチョギ』『こいぬのうんち』『ポキポキ村のトケビ』であり、この4冊の読まれ方を通して、幼稚園児における、絵本と異文化の問題について考察してみたい。

●「絵本の読み聞かせ」とは何か
鳥越信（聖和大学大学院）

2002年の絵本学会神戸大会、2003年の同長野大会で、私は共に「絵本の読み聞かせ」にかかわる分科会に出席した。そして、パネラーやフロアからの発表によって、「絵本の読み聞かせ」における主役が、絵本＝作品ではなく、読み手＝伝達者に移ってしまった事を確認することができた。

そうした傾向が生まれてきたのは、ここ十年ほどのことだが、今やそれが全体の主流になってしまった観がある。私が子どもの読書運動に参加するようになって五十年余りたつが、当時の考え方は全く逆だった。

「絵本の読み聞かせ」において、絵本と幼児の間に立つ橋渡し役の読み手は、脇役どころか黒子に徹するのが鉄則だった。なぜなら、読者に語りかけ、働きかけて、読書の楽しさに誘ってくれるのは作品＝絵本であり、それ以外の何かが存在する必要は全くなかったからである。

このことは、自分で本が読める子どもや大人を考えれば、読者にメッセージを送っているのは作品以外にはないわけで、いわば自明の理といえる。ところが、幼児の場合には母親・保育者・図書館員等々の読み手＝伝達者が存在する。そこに「絵本の読み聞かせ」の特殊性があったといえるが、にもかかわらず、伝達者は常に黒子に徹してきた。

それがここにきて、いつのまにか伝達者が作品にかわって主役となり、子どもとたえず会話をかわしたり、作品にプラスαを加えたり、さまざまなパフォーマンスを行うなど、「絵本の読み聞かせ」の様相は、全く様変りしてしまった。そうした状況に立って、改めて「絵本の読み聞かせ」とは何なのか、原点に立ち戻って考えてみたい。

■C室　司会：石井光恵

●絵本の翻訳を考える
―”トッケビ”をめぐって―
齋木恭子（鳥取短期大学）

絵本が翻訳出版されるときの問題点として、異なった文化の差異が考えられる。

韓国と日本は歴史的関係が深い国である。その文化の類似性のため、両国の絵本がそれぞれの言語で翻訳出版されたとき、一見、自国作家の手によるものと見間違えてしまいそうになることがある。しかし、両国は似て非なる文化を持っている。

本発表では、『せんたくかあちゃん』（さとうわきこ作・絵）と韓国語翻訳版『トッケビルル パラボリヌリ オンマ』を例に、かみなりとトッケビの文化的背景の解釈の移行について取り上げてみた。

トッケビとは、虎（ホランイ）と同様、韓国の昔話によく登場する韓国独特の妖怪である。鬼神の系統に属するが、

神でも鬼でもない。韓国では年齢層を問わずよく知られた存在でありながら、その形象については定まっていない。そのため、絵本に登場するトッケビの姿は絵本作家のイメージにより様々であるが、その大半が角をもった日本の鬼の姿に似て描かれている。そのことを理由としてか、韓国の絵本の日本語翻訳では”トッケビ”は”オニ”或いは”化け物”と訳されているものを見かける。反対に、『せんたくかあちゃん』では、その形象化された姿から”かみなりさま”が”トッケビ”と訳された。そのため、トッケビが持つ一般的な概念が翻訳にも表れることとなり、その結果、翻訳によって日本独自の特異性が薄められることになった。

これらのことを例示し、絵本の翻訳について問題を提起してみたい。

●月刊絵本「こどものとも－1962年4月号～1967年9月号－」にみる性別役割分業観

伊藤美佳（和泉短期大学）

1998年11月の日本乳幼児教育学会第8回大会において、月刊絵本「こどものとも」500冊(1956.4～1997.11)において、性別役割分業観がどのように描かれてきたのかを検討した結果を発表したが、十年一区切りの4時代での検討というあいまいな時代区分での考察だったため、2003年11月、日本乳幼児教育学会第13回大会において、時代区分を、女性の生き方に大きく影響を及ぼしたと思われる日本の施策に従って、9時代に分類しなおし、その第一の時代・1956年4月号～1962年3月号に関して考察した結果を発表した。また、その際、性別役割分業観がみられた作品の内容分類に関しても検討しなおし、教科書を使って性別役割分業観を分析した仲野暢子(1983)、伊藤良徳(1991)、絵本を題材に男女像を分析した藤枝澪子(1983)ら3名の分析方法を参考に、作品を「従来の性別役割分業意識のみられる作品（典型的性別役割分業観）」「従来とは異なる性別役割分業意識のみられる作品（異・性別役割分業観）」「その両方の意識がみられる作品」「性別役割分業観が感じられない作品」の4種類に分類し、性別役割のみられた作品に関しては、その内容を更に細かく15項目に分類した。

今回の発表では、9時代のうちの第2の時代・1962年4月号～1967年9月号に関して、「こどものとも」の中でどのように性別役割分業観が描かれてきたのかを、第1の時代と同様の方法で検討した結果を発表する。

●児童書イラストレーターE.ラチョーフ作品にみられるアレゴリー

田中友子

（ロシアグラフィックコーナー主催・岐阜大学非常勤講師）

絵本「てぶくろ」の挿絵画家として日本でも有名なロシアの画家E.ラチョーフは、動物昔話を含む多くの昔話の挿絵を描いた。トーテム信仰が強かった古い時代に生まれたものは別として、人間の関心が人間自身に向けられるようになってからの動物昔話では、動物は、動物そのものでなく人間の姿を映し出す手段として描かれるようになった。とりわけロシアのように遅れた専制君主国家では、読み書きのできない民衆が意志を伝えるには様々な口承文芸のアレゴリーを利用するほかなかった。戦後、動物昔話の挿絵の依頼があった時、ラチョーフは服を着た動物を描くことによって、動物昔話の中のアレゴリー的要素を表現することを思いついた。それまでにも、服を着た動物の登場する動物昔話の挿絵は様々な画家達によって描かれていたにもかかわらず、このとき、そこに潜む風刺的要素が社会批判を許さぬ当時のソビエト社会において、敏感に察知され、危険視された。また、ラチョーフが大人のための現代寓話の挿絵も多く手がけていた70年代に描いた動物昔話の挿絵には、それに先行する時期に描かれた動物昔話に見られたのとは違うアレゴリー性の存在が認められる。

ソビエト国家という特殊な社会的、時代的背景を踏まえた上で、異なるジャンル（動物画家として動物の生の生態を多く描いた初期の作品、魔法昔話や大人のための現代寓話のための挿絵など）と異なる制作時期に属するラチョーフの様々な作品を比較しながら、また他の画家による作品と比較しながら、その挿絵に特徴的なアレゴリーの要素について探ってみる。そして動物昔話におけるアレゴリー性のいくつかの形について、その本質を明らかにする。

●美術へのアプローチとしての絵本の可能性

－保育者養成の立場から－

杉浦篤子（藤女子大学）

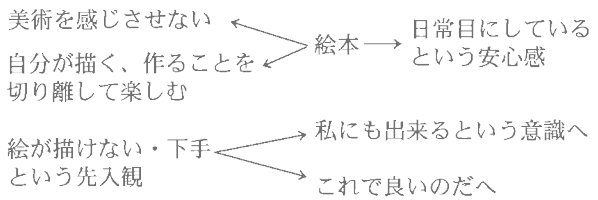
人間の根本的能力として持っているといわれる造形感覚だが、入学してくる学生や最近出会う人たちからは美術が苦手ということをよく聞く。現在、イメージする力は開拓され発展させる機会が限られ、美術は難解なもの、高級なもの、自由に見ることさえ一部の専門者に任せ、ただ知識を得るだけになってしまったように思える。しかし原始時代から、人間が本来持っていたであろう造形能力が失われてしまったとは思えない。その能力に、飛躍的に発展を遂げる現代の絵本が、美術への入り口、誘導路となる働きかけが出来るのではないかと考える。保育者養成の現場で絵本を使っての美術入門の実践をまじえて、考察を加えていきたいと思う。

入学直後に行ったアンケートで、美術が嫌い、苦手と言う学生たちが「絵本は好き」と答えていることに注目した。「絵本」を使い、美術の授業であることを意識させず、しかし見る体験、知る体験、考える体験の底辺作りをすることが出来るのではないだろうか。

・選んだ絵本

「水仙月の四日」作／宮沢賢治 絵／高松次郎
物語テープ出版

「白雪姫」作／WARJA LAVATER
出版／ATELIERS ARTE, PARIS



この二冊の絵本はどちらも単純な形と色彩で表現されており、具象、写実ではない。にもかかわらず、美術が苦手になってしまった者に、難解さを感じさせない、読み終わって、これなら自分にも出来そうと感じさせる。絵が抽象的である分、文は絵とつながり、その物語の世界を形づくるからこそ、関心を呼び、面白がらせ、自分にも作れそうとまで思わせるのではないだろうか。○△□でもちゃんと絵本が描ける、その面白さはましてよく知っている「白雪姫」ならなおさらである。

美術館へ出かけるなど、見ることの体験が少ない学生たちにとって、絵本は見る・読むだけではない、創造的鑑賞という別の役割を担ってくれる存在であり、指導者は目的をもって絵本を選択し、どのように使うかによって、造形美術の経験不足を補うに有効であると言えるのではないだろうか。

●絵本研究用語　その1－絵本の構造

中川素子（文教大学）
加持ゆか（グラフィックデザイナー日本デザイナー学院）
千田篤（会計士）
谷本誠剛（関東学院大学）

絵本学会は、違った視点から絵本に向き合うさまざまな立場の会員で構成されています。

研究にあたり、そのどの分野も統一された用語を持っているわけではありません。会員が各々違ったテーマを研究するにしても、共通基盤としてお互いに理解しあえる研究用語があればと研究委員会は考え、研究用語に取り組むことにいたしました。

将来的には絵本辞典を作れればと希望していますが、その前段階として絵本研究に必要な用語を洗い出し、簡単な解説を加え、順次学会論文集に発表していくつもりです。

第一年目として、まず最初にとりかかったのは絵本の「構造」を表現する用語です。絵本の性質上、つくりの構造と物語など内容の構造は密接に関係し合っていますが、用語解説としては分けて考えた方が分かりやすいことでしょう。それで無理に統一することをせず、同じ用語が重複してもかまわないことにしてあります。

構造を表す用語のおおまかな項目として大きく３つに分け、各々をいくつかの小さな項目に分けてみました。

１、つくりの構造（イ、綴じかた、ロ、開き方、ハ、ページの形態、ニ、編成、ホ、仕掛け、ヘ、素材の変化、ト、電子絵本）
２、読み方見方による構造（イ、コラボレーション型、ロ、仕掛け型）
３、内容の構造（イ、物語、ロ、物語以外）である。

用語は、単に言葉の意味だけでなく具体例を出すことにより理解を深めると考えています。実際の絵本を手にとった時に、どの研究分野の方でも用語が共通して浮かんでくれれば幸いです。

太田大八に聞く なぜ絵本にこだわるか

太田大八（絵本作家）
聞き手：川端強（祈りの丘絵本美術館）

太田大八氏は長崎県生まれ、現在八十五歳。半世紀以上にわたって、絵を描き続けてきました。氏の生涯にわたる作品のほとんどを所蔵し、三年前『太田大八作品集』を出版した、「祈りの丘絵本美術館」館長の川端強が聞き手となり、『なぜ絵本にこだわるのか』というテーマにそって、話を聞きました。

太田氏は、多摩帝国美術学校図案科で絵を学びました。在学中に第二次世界大戦が勃発。軍の権力が嫌だったと言う氏は、徴用か兵隊かという選択をせまられる中での戦争体験を、ユーモアをまじえて語りました。社会に出て、出張で広島県大竹市に入り、原爆投下翌日の凄惨な光景を目にしたそうです。この間一髪で被爆を免れた時のことが、特に思い出に残っていると言います。戦後は、大阪に復興の建築パネルを建てたことから、再び絵の世界へ。そして、デザインの仕事をするために東京へ戻り、小屋を建て、「スタヂオ・トーキョー」を設立しました。街で偶然再会した同級生の依頼でポエムに絵を描いたことがきっかけで、絵本の世界に入ることになります。

太田大八氏の画風は驚くほど多彩です。どの絵にも一貫して流れるデザイン性が、氏の作品を伸びやかにしています。今回は、それらの作品をＯＨＰを通して、『かさ』（文研出版）、『はなたれこぞうさま』（童話館出版）、『やまなしもぎ』（福音館書店）、『あかっぴょろ』（あかね書房）、『ダイナザウルスブギウギ』（個展）など、いくつか紹介し、氏の純粋絵画と絵本についての考えを聞きました。

「純粋絵画は、画家自身の満足を求めて描かれる絵ですね。できあがった作品に対して、画家が納得し満足すればよいわけで、結果的に、他の人がその絵に感動したり、共感したりということがあるかも知れない。人に見られて評価されるのは二次的なことなのです。けれど、絵本の絵は、コミュニケーション・アートです。それは子どもであったり、大人であったりしますが、相手に何かを伝えようとする絵です。ですから、画家自身が美しいと思いながら、同時に他者にも美しいと思わせるように描こうとします。…。」

太田氏は、絵本を通した国際交流が平和への礎になると、外務省派遣による訪中団に参加したり、韓国でワークショップを行うなど、常に絵本での交流に努めてきました。また、氏はこの絵本学会の創立のメンバーであり、現在は「ＷＡＶＥの会」を立ち上げ、子どもと絵本・本との出会

いをさらに広げる活動をしています。

しめくくりとして、「子ども達のことを思い、絵本にこだわるのはなぜなのか」という質問に対して、「子ども達のことは心配していません。（高齢になった）自分のことを心配しています」と、聴衆をわかせ、子どもにとって、絵本や本はかけがえのないものであるという、シンプルでいて確かな信頼を語りました。戦争を体験して生きてきたことへの想いも、きっとその底流にはあるのでしょう。折々に笑いをさそう楽しい時間でした。

（文責：平野逸子）

ラウンドテーブル

■ラウンドテーブル１「絵本作家研究」
長谷川集平の世界
話題提供者：長谷川集平（絵本作家）
鳥井新平（近江兄弟社学園）
コーディネーター：上出恵子（活水女子大学）

1991年6月9日（ロックの日）に長崎に居を移し、首都圏・関西中心から離脱しオルタナティブな視点に立脚し＜作家としての第二幕＞をすごす長谷川集平さん自らが話題提供者となった「長谷川集平の世界」は、当然の成り行きというべきか、話題提供者・コーディネーターの別なく、長谷川さんに質問するインタービュ形式に終始しました。

まず、長谷川さんをはじめ、「近江平平絵本部屋」（集平、新平で「平平」）の鳥井新平さん、また長崎で95年に対談し、「長崎絵本セミナリヨ」にも関わっている上出恵子も関西出身であるということから、関西弁の話題から始まりました。会場からの意見も加わり、「はせがわくんきらいや」がなぜ関西弁（姫路弁）なのかとの質問に対して、あの当時（２０歳の頃）自由に表現できるのが姫路弁だったこと、創作えほん新人賞には文字なし絵本の「あのやまこえてやってきた」と標準語の動物絵本（はじめて雪をみたライオンの話）も応募したが、結局「はせがわくんきらいや」が賞を取ったこと、その後だれにでも読める言葉でということで標準語で書くようにしたということ、さらに一番小さい人、弱い人に分かるものをということで手書きの文字などで装飾しないでも理解できるニュートラルなものを目指すようになったということを話されました。

一方、このような言葉に対して絵はどうなのかとの質問には、ある時期から絵が描けなくなったという些かショッキングな話を伺いました。「土手の上で」のモデルとなった見えない凧を揚げている人や長崎で見た蚊焼のペーロンを例に、見えないものと向かい合っている人の中で何が起こっているのかを考えた時、ビジュアル・アートである絵本（絵）が描けなくなったとのことで、それはやがて言葉でもって絵本を書いた「見えない絵本」で吹っ切れ、どうせ絵を描くなら目に訴えかける快感や歓びを描きたい、と思うようになったとのお話でした。

次いで長谷川さんの絵本に見られる暴力についての言及になりました。人間の中に暴力とか狂気というものが潜んでいて、よく怪獣を描くがそれは意識下の暴力性を描いたもので、それとどう付き合っていくか、和解し克服するかということが我々の課題であり、人間の文化とはこれを違うものに置き換えていくことであり、大人が子どもに伝えていくのはこのような文化の継承であるという長谷川さんの基本姿勢が静かに物語られました。

その作品の全てが＜ラブ・ストーリー＞、すなわち人間が目の前にいる人間をどうすれば愛せるのかというものであり、互いの距離を縮めようとした時に暴力、さらには性の問題も絡んでくるのだと述べて、そのような＜愛＞とは

一作ずつ絵本をかく営みの中で自分を克服していくことで指し示していくしかないという長谷川さんは、その言葉通りに具体的に村上康成さんとの三部作（「かいじゅうのうろこ」「おんぼろヨット」「プレゼント」）を取りあげ、村上さんとの関わりや10年に及ぶ創作過程で何があったのか、また村上さんの絵がカラーマーカーで描かれているなど技術的な問題を含めて興味の尽きないお話をして下さいました。
この他にも大人と子どもの関係や長崎と日本と文化の問題など長谷川さんが話されたことは数多く、休憩なしの２時間も瞬く間に過ぎ、最後は長谷川さん、鳥井さんの「はせがわくんすきすき」のライブで、空前絶後ともいうべきＲＴでした。　（文責：上出恵子）

■ラウンドテーブル２「絵本受容研究」
ブックスタート
話題提供者：
松居直（ＮＰＯ法人「ブックスタート」理事長）
土井和香（諫早市立諫早図書館）
谷口暁美（壱岐市勝本支所市民生活課）
コーディネータ：二羽史裕（長崎県教育庁生涯学習課）

今回のラウンドテーブルは、長崎県のブックスタートの現状を紹介しながら、参加者に考えていただこうという形をとった。
先ず諫早図書館司書土井和香さんが2001年10月から始まった同市の取り組みについて報告。1歳半の健診時を利用し、受診率は93～95％である。よく1歳半では遅くはないかという質問をうけるが、1歳半には1歳半の意味があるとのこと。年間1000組の親子と出会い、1組約5分くらいかけて話を交わしている。諫早市が比較的うまくいったのは事前に図書館、保険師、ボランティア、児童福祉室との連携がうまくいったことが要因だろう。毎回終了後、保険師と司書とのカンファランスを開き問題点を指摘したり、気になる親子について意見をかわしている。市町村の合併後はどうなるかが今後の課題であるという。
壱岐市からは保険師の谷口暁美さんが壱岐の島の観光案内も兼ねた紹介をされ、会場はなごやかな雰囲気に包まれた。対象年齢は７ヶ月で、やはり健診時を利用し、月2回4会場で行っている。スタッフは保健師と読書ボランティア。ブックスタートが実施されてから幼稚園での読み聞かせが盛んになり、地域で読み聞かせの輪が広がっていった。ただ健診に来ない人をどうしていくかが課題であるという報告であった。中でも会場がどよめいたのは壱岐市の出生率が2.7という紹介があったときのことであった。
次にＮＰＯブックスタート松居直理事長から日本のブックスタートの理念についての話などがあった。イギリスのまねでなく、日本独自のブックスタートを作り上げていきたい。ブックスタートは読書運動でもないし、絵本の普及を目指すものでもない。絵本を渡すのではなく絵本を介してことばを手渡す運動である。赤ちゃんと絵本を介したことばの分かち合い、お母さんの幸せを願う運動がブックスタートである。
実際ブックスタートの場では明らかにテレビ漬けの子に出会う。全く落ち着きがないし、目を合わせようとしない。ブックスタートはある意味でテレビとの戦いであると考えるのだがという指摘に対し、松居理事は
「親が絵本好きだと赤ちゃんも興味を示すし、その逆のこともいえる。4ヶ月でもそれははっきりと見えるものだ。テレビで子育てしている人が現実には多くいて、幼児番組であればいいと思っている人もかなりいる。しかし、絵本のページをめくることが大切で、自分のペースでことばの空間を作っていくことが重要なことだと考える。」と答えられた。
全体的にブックスタートに対して参加者は好意的に受け止めており、図書館でのお話会に赤ちゃんを一緒に両親で参加される人が増えたなどという意見も会場からはあった。
テレビ・ビデオなどといった電子メディアにどっぷりと浸り、浸らせて何とも感じていない親をブックスタート会場で目のあたりにすると悠長なことをいってはいられない現実がある。そこにブックスタートがあると思うのだが。
（文責：二羽史裕）

■ラウンドテーブル３「絵本の国際交流アジアの絵本」
韓国の絵本
話題提供者：イ・ホベック（絵本作家）
佐々木宏子（鳴門教育大学）
コーディネーター：シン・ミョンホ（武蔵野美術大学）

最初は日本と韓国の絵本を、現在に至るまでの経緯から考えて見ましょう。そうすることで絵本に関る問題や今後の方向性、即ち、絵本に出来ることも考えることが出来るのではないでしょうか。まず、佐々木さんに日本の絵本についての話をお願いします。
佐々木：私は幼児教育、特に幼児心理学的な側面からの幼児教育を考えています。イギリス絵本には、日本に渡っている識学教育から見た絵本論を始めとし、子供との関り方も多いに研究されています。しかし、幼児の内面を覗くこと、心理学的な側面でのアプローチは観察でも話し合いでも追及することが出来ません。幼児の心理を把握するためには何らかの道具なしでは内面の奥までは覗く事が出来ません。そこで、絵本の描き方に色んな要因が沢山含まれていることに気づきました。幼児の内面に届く適正な素材として私は絵本を考えたのです。絵本には、そのようなことが現れていて、子供の絵本との関り方を観察することで子供の心理が読み取れる。そのような理由から絵本に深い興味を持っています。
次に、韓国の絵本に関してリさんに話をお願いします。
リホベック：私自身、子供のときには絵本を見たことがありません。私が今のような絵本を見たり、絵本に惹かれたのは大人になってから、大学生の時でした。美大生だった私には、絵本としてではなく新鮮なイラストレーションとしての出会いでした。このような絵が何処に使われるのだろうという好奇心と視覚世界からの刺激は新鮮なショックであり、魅力的な表現への感動でした。

私が、絵本として今のような絵本を読み、理解したのはその後、フランスに滞在する時で、図書館で子供と一緒に絵本を見る時でした。その時間は本格的に絵本と関る大事な時間で、私には絵本がある世界として構築されました。

司会；韓国に色んな外国の絵本が正式に翻訳、出版され始めたのは、1990年に入ってからです。1990年武蔵野美術大学から資料を提供され、国立図書館で展示をした後、私がある出版社と契約を結んで、本格的な外国絵本を出版することに関ることが始まりで、それは多くの出版社や人々に絵本というものに興味を与え、新たな観点で見つめさせました。それまでは、単なる読み物としての子供の本が主流となっていたものの、今のような概念での絵本ではありませんでした。一瞬にして多量の外国の絵本が翻訳、出版されることで絵本のイメージは、特に大人には絵本の視覚的な表現が関心を集めました。今の韓国の絵本は視覚的な表現で優れた作品が多いです。絵本を作る人も、美術専門の人が多く、大人の目に届く絵本、視覚的な表現が優先される絵本が多いため、多様な技法が実験的に披露される作品が多いのも特徴であると思われます。

佐々木；私が絵本に期待する一面、子供の心理を読み取れる絵本を探してもなぜか日本の絵本ではそのような良さがあまり読み取れない。それに比べて韓国の絵本には子供の内面を描いたものが沢山あることに気づきました。そのことを韓国の絵本作家リホベックさんに伺いたいです。

リホベック：韓国の絵本と言っても全般的なことはあまり知りません。それで、私の経験を中心に答えます。私の実生活から感じるのは、私が好きな絵本を私の子供は好まない。しかし、子供は自分が好きな絵本があります。それで、その絵本を幾度も繰り返して、ぼろぼろになるまで読み続けます。その絵本は彼は勿論、私にも宝となっています。絵本を作る立場としても絵本は何なのか、どのような絵本が良い絵本なのかを常に考えます。私はその答えとして、あるフランスの有名な評論家の言葉に辿り着きました。

「子供のための文学はない、ただ文学があるだけだ、
子供のための芸術はない、ただ芸術があるだけだ。
子供のためのグラフィックはない、ただ、グラフィックがあるだけだ。」

私は子供のための絵本を作ります。しかし、対象である子供に感銘を与えようとして絵本を作ろうとはしません。ただ、子供が関心をぶつける対象があまりない韓国の現状を考えた時、そのような子供に絵本と関るという環境を提供したいだけです。韓国の子育ての環境はあまり良いとはいえない。その現実の中で、私が作る絵本が、よりよい子供の環境の一環であってほしいという願いの気持ちで絵本を作っています。数多い本の中には私が好きな本もあれば子供が好きな本もあります。しかし、私が好きな本が必ず子供に好かれる本ではありません。また、私が好きな絵本が必ずしも芸術的な絵本であるとも言えません。そこで、私は子供への環境提供という意味で、多様な環境の一環となる絵本を作るため、新しい技法や何か新しい絵本を作るため、力を入れるだけです。それは、大人と子供の異なる関心と嗜好を話し合えるきっかけ、場所、媒体として絵本が提供されて欲しいと思うからです。たとえ、私が作った絵本が芸術的でも新しい物でもなくても、何らかの面白さによって大人と子供を分かち合える、そのためのものであって欲しいのです。

司会：韓国の絵本の事情はリホベックさんの経験で示唆されるように、目前の問題を解決するために必死です。それは、韓国の置かれている状況、特に絵本を含めた子供の状況でもあります。今からは韓国の絵本を見ながら、作家としての作品観や表現の意図等を伺いながら韓国の絵本の現状や問題点、それから絵本が出来ることを考えてみましょう。

佐々木：『世界一強い雄鶏』を見ると韓国の家族像がよく見える。それは、古い伝統、いわゆる男子社会のイメージが強く感じられる絵本ですが、リさんは現代の時代性との関係について、特に表現はどのような思いで行いましたか？

リホベック：『世界一強い雄鶏』は家父長制の話です。家父長の象徴である雄鶏には華やかな羽がついています。特に最後の絵の雄鶏はもっとも華やかさを強調させています。雄鶏の華やかな羽は一生懸命に生きてきた男の生き様、人生の最後を肯定性で飾ることを意味させています。個人的には、私の義理の父を、私の子供にはお爺さんを描きました。その存在で家父長制の一面、家長の威厳や偉い姿を描きました。それは他でもない、家族の暖かい愛が作ってあげるものであることを描きました。具体的に言うと、年寄りへの尊敬と養いの気持ちを大事にすることです。家にはこのような家風が生きているので、実際には無力なお爺さんですが、彼が咳をすると空気が変わります。しかし、若い世代の父である私が咳をすると、子供は‘風邪なの？’と言っています。

子供はお爺さんからは威厳のあるお父さんのイメージ、私からは今日のお父さんのイメージという二つのお父の像が形成されています。私にはお爺さんのような威厳は無いが、子供は威厳のある父の象を理解しています。この作品を見た多くの人が自分の話に置き換えるほどの共感を得ているようです。決して、家父長制度が良いと言うことではありません。ただ、過去の価値観で生きてきて、今の生活している年配の方への理解や年配を敬うという良い伝統を理解して欲しいし、伝えて行きたい。今は力は無いが、昔から頑張ってきた先輩の人生を、そして、先輩への尊敬という美しい文化を。

時には、フェミニスト達から批判も受けますが、男社会、男性の強さを強調し、称えるのではなく、今日も生活を共にしている前世帯のお父さん、家父長の世界で生きてきた人たちとの共存を考えた時、価値観が違うことが理由で彼らを見捨てることはできない。彼らの長い人生をも含めた生活が今にいたった現実であるので、時代や価値観が変わったとして彼らの存在を否定するわけにはいかない。昔と今の事実をそれぞれ理解し、認めるべきであるということを絵本にしました。この絵本を読む子供たちは二つの意味をちゃんと読み取っています。そして、年配には気を使い、敬い、恐れます。実際には無力でも理解し、受け入れるこ

とで家内でのバランスが取れるのです。

佐々木：その絵本は時代と文化をどのように継いていくべきなのかをよく描かいています。話題を絵本『黄色いかさ』に移ります。この絵本には裏表紙にCDが付いています。「雨にほは私のお家。。。。。」の詩の歌が。しかし、本の中には文字や文章がない。音楽の歌詞を本文として入れるのは考えませんでしたか？

リホベック：この音楽は飾りではなく、CDの使い方の説明通りに最初はゆっくり、二番目は速いテンポ、三番目はより速い音楽を聴きながら絵本を読むと耳からの音と視覚への訴えがより楽しめる企画です。

100％作家自身の作業となったこの作品は、５年かけて出来上がりました。田島誠正氏の絵本を参考にしたものの、特に視覚と聴覚の調和を重視した作品です。音楽も子供の環境として与えたい気持ちから作ったものです。多様なジャンルの音楽の中で、特に韓国の古典音楽は触れる場が非常に少ないです。それで私は古典音楽を聴く機会を提供するつもりでパンソリCDが添付された絵本も作りました。意図的に聞くことが出来なくても身辺、近場に音楽があることで、不意に聞くことも出来るし、それで知ることも出来る。そのチャンスとしてCDをいれました。いつか、好きにもなれると思いますので。

司会：絵本には大人が好きな絵本と子供が好きな絵本があります。大人が好きな絵本と子供が好きな絵本は必ず一致しなくても、それぞれの好きな絵本を認めることで、絵本がテーマとなって大人と子供の話が披露される、コミュニケーションが成立します。リさんはそのような素材として、題材として絵本を作っているようです。

佐々木：指遊び、手遊びが出来るファーストブックとの関連性も見えますね。

リホベック：私の絵本の素材は偶然からスタートしています。偶然を出来事とするためには具体的なきっかけで繋ぐことで確かな物体の絵本に作られます。それまでは沢山の人と出会いが、多くの経験を総合させ、子供に繋がる絵本になります。

　韓国の作家達においては日本の絵本も大いに参考になっているようですが、どのような作家、どのような作品が多く読まれていますか。

リホベック：私はフランスにいる時、日本の作家の絵本に接しました。絵のスタイルで特別に影響を受けた日本の作家はいませんが、本つくりに関しては大変参考になりました。・・（中略）・・

まとめ：短い時間ですが、今までの話の中から絵本は子供のための本であるというより子供と大人を繋ぐコミュニケーションの媒体、過去と現在、現在から未来を繋ぐ媒体であることが良く分かりました。そして、絵本は違う文化を認知させ、文化の違いを楽しませ、それを認めながらお互いを認めることができるようにしてくれます。違う立場でも差異や違いを認めることで対等な立場であることを知り、そこからはコミュニケーションがスタートします。それこそ、絵本に出来ることで、今後のビジョンを示唆してくれるのではないでしょうか。（文責：シン・ミョンホ）

絵本学会第７回定期総会

日時：2004年6月12日（土）午後6：00～6：35
場所：活水女子大学
出席者：出席者２９名・委任状１２４名
議長：佐々木宏子
書記：石井光恵

１．開会の辞
上出恵子大会実行委員より開会の辞が述べられた。

２．議長･書記　選出
議長に佐々木宏子運営委員、書記に石井光恵運営委員が選出された。

３．会長挨拶
今井良朗会長より、第７回定期総会開催に当たって挨拶が述べられた。

４．2003年度活動報告に関する件
三宅興子運営委員より、総会資料にもとづき、下記のような2003年度活動報告がなされ、承認された。

■絵本学会2003年度活動報告

◎第6回絵本学会大会
　6月14日　6月15日　長野県岡谷市カノラホール・イルフプラザ生涯学習館
　テーマ：「絵本と絵本美術館」

◎理事会・運営委員会
　4月 6日　　理事会
　5月11日　　運営委員会
　5月18日　　理事会
　6月14日　　理事会
　7月 5日　　運営委員会
　7月19日　　理事会
　9月27日　　運営委員会
　11月9日　　理事会
　11月22日　　運営委員会
　2月28日　　運営委員会

◎広報
　広報紙『絵本学会ニュース』の発行　5月、9月、1月
　学会ＨＰの運営

◎企画
　絵本フォーラム03
　「赤ちゃんと絵本のために、今大切なこと ファーストブックとブックスタート」の開催　8月23日

◎研究
　研究委員会による絵本研究用語検討の活動
　会員の研究グループに関するアンケート調査

研究活動への支援　3件
・戦後60周年子ども文化プロジェクト
代表者：正置友子
・日本絵本史研究会　代表者：大橋眞由美
・絵本表現研究会　代表：笹本純
「絵本原画展・図録」文献解題の作成
2003年度絵本参考文献目録の作成
◎出版
絵本学会研究紀要『絵本学』第6号の刊行
機関誌『BOOK END』2号の発行
◎会員名簿の発行
◎会則検討
前会則検討委員会を解散し、新委員会を発足させた

5．2003年度会計･会計監査報告に関する件
総会資料の2003年度決算書にもとづき、笹本事務局長から2003年度の会計報告がなされ、監査担当の増成隆士氏より、監査の結果適正と認める旨の報告がなされた。審議の結果、2003年度の決算報告が承認された。
（別添資料参照）

6．2004年度活動計画に関する件
総会資料の2004年度活動計画案にもとづき、今井会長より2004年度の活動計画について説明がなされ、下記2004年度活動計画が承認された。
なお、会則の検討の件については、本総会の「8会則検討について」の議題で改めて取り上げ、詳細を紹介した上で、次回総会で最終決定をする予定であることが説明された。
また、他学会等との連携推進について、すでに韓国基礎造形学会へ絵本学会として参加しているという報告。

■絵本学会2004年度活動計画
◎第7回絵本学会大会
6月12日(土）6月13日（日）
活水女子大学（〒850-8515 長崎市東山手町1-50）
テーマ：「絵本にできること―現在から未来へ」
◎広報
・『絵本学会ニュース』の発行　5月、8月、１２月
・ＨＰの管理運営
◎企画
・絵本フォーラム2004
テーマ：絵本の「読み聞かせ」
―それぞれの実践、それぞれの主張（仮称）
９月４日（土）世田谷文学館
・絵本作家を目指す人のためのワークショップの開催
◎研究
・絵本研究用語の研究・検討
・研究活動への支援助成
・2004年度絵本参考文献目録の作成
・絵本学文献資料解題の作成
・絵本研究に関する講演会の開催（企画委員会と合同）
◎出版
・絵本学会研究紀要『絵本学』第7号の刊行
・機関誌『BOOK END』3号の発行
◎会則の検討
◎「子どもの本WAVE」，他の学会等との連携推進
◎学術団体登録の準備

7．2004年度予算に関する件
笹本事務局長より、総会資料の2004年度予算書（案）にもとづいて、予算案についての説明がなされ、審議の結果、原案通り2004年度予算が承認された。
なお、会員より、10周年記念事業積立金の費目は2003年度会計報告にはないのに、2004年度の予算案で、前年度予算額の欄に1,200,000円、前年度決算額の欄に1,400,000円の計上があるのはおかしいと言う指摘があった。この費目は、2003年度では「機関誌刊行積立金組入れ」に当たり、その点について備考に記すことで、了承された。
（別添資料参照）

8．会則検討について
三宅興子会則検討委員会委員長より、会則検討委員会からの報告ならびに会長への答申内容について、2004年度総会資料をもとに説明があり、改定案が紹介された。
会則検討についての今後一年間のスケジュールについて、今井会長より補足説明と下記提案がされ承認された。
＜会則検討についての今後一年のスケジュール＞
1）本総会で提案された改定案を、総会出席者以外にも配付し、広く意見を聞く。
2）再度会則検討委員会を発足させ、会員からの意見を検討し、最終案を作成する。
3）次回総会で、最終案を審議し、決定する。

9．閉会の辞
上出恵子実行委員より閉会の辞が述べられ閉会した。

2003年度決算書　　2003年4月1日～2004年3月31日　　絵本学会

［収入］

項目	予算額	決算額	増減	
会費収入	2,672,000	3,552,000	880,000	
賛助会員	220,000	280,000	60,000	賛助会員20,000円×14口
正会員	2,400,000	3,228,000	828,000	正会員8,000円×403.5件（340名）
準会員	52,000	44,000	△8,000	準会員4,000円×11件
利息収入	100	7	△93	
貯金利息	100	7	△93	
参加費収入	400,000	662,800	262,800	
大会参加費	300,000	588,800	288,800	
フォーラム参加費	100,000	74,000	△26,000	
積立金	1,400,000	1,400,000	0	
その他収入（入会金等）	120,000	114,975	△5025	
前年度繰越金	433,668	433,668	0	
合計	5,025,768	6,163,450	1,137,682	

［支出］

項目	予算額	決算額	増減	
運営費支出	450,000	763,288	△273,288	
総会・大会費	300,000	612,800	△312,800	印刷・消耗品・通信費等
大会運営補助費	150,000	150,488	△488	
活動費支出	190,000	91,018	98,982	
専門委員会活動費	100,000	1,018	98,982	
その他（研究助成費等）	90,000	90,000	0	
旅費・交通費	400,000	407,900	△7,900	委員出張費等
謝金支出	220,000	150,000	70,000	
講師謝礼	100,000	50,000	50,000	フォーラム講師謝金
紀要編集制作費	70,000	70,000	0	
チラシ制作費	50,000	30,000	20,000	
機関誌刊行費支出	1,000,000	1,200,000	△200,000	
印刷費支出	670,000	739,610	△69610	
絵本学会ニュース	200,000	207,900	△7,900	
研究紀要	250,000	290,000	△40,000	
会員名簿	20,000	83,160	△63,160	
その他	200,000	158,550	41,450	
消耗品費支出	20,000	1,0204	9,796	事務消耗品費
通信費支出	400,000	237,640	162,360	ニュース等発送費・通信費
報酬支出	300,000	199,062	100,938	
事務局報酬	300,000	199,062	100,938	事務局１名＋アルバイト
会議費	20,000	46,550	△26,550	
雑費	20,000	15,415	4,585	
予備費	80,000	0	80,000	
機関誌刊行積立金組入れ	1,200,000	1,400,000	△200,000	04年度から10周年記念事業積立金
次年度繰越金	55,768	902,763	△846,995	
合計	5,025,768	6,163,450	△1,137,682	

（単位：円）

◎資産残高明細　2004年3月31日現在

現金	20,189円
常陽銀行研究学園都市店	298,394円
筑波大学内郵便局	1,984,180円
計	2,302,763円（内積立金1,400,000円）

2004年度予算書　2004年4月1日～2005年3月31日　　絵本学会

［収入］

項目	前年度予算額	前年度決算額	予算額	
会費収入	2,672,000	3,552,000	3,080,000	
賛助会員	220,000	280,000	300,000	賛助会員20,000円×15口
正会員	2,400,000	3,228,000	2,720,000	正会員8,000円×340名
準会員	52,000	44,000	60,000	準会員4,000円×15名
利息収入	100	7	30	
貯金利息	100	7	30	
大会等収入	400,000	662,800	400,000	
大会収入	300,000	588,800	300,000	
フォーラム収入	100,000	74,000	100,000	
積立金	1,400,000	1,400,000	1,400,000	
その他収入（入会金等）	120,000	114,975	120,000	
前年度繰越金	433,668	433,668	902,763	
合計	5,025,768	6,163,450	5,902,793	

［支出］

項目	前年度予算額	前年度決算額	予算額	
運営費支出	450,000	763,288	550,000	
総会・大会費	300,000	612,800	300,000	
大会運営補助費	150,000	150,488	150,000	
フォーラム運営費			100,000	
活動費支出	190,000	91,018	190,000	
専門委員会活動費	100,000	1,018	100,000	
その他（研究助成費等）	90,000	90,000	90,000	
旅費・交通費	400,000	407,900	450,000	委員出張費・講師旅費等
謝金支出	220,000	150,000	170,000	
講師謝礼	100,000	50,000	50,000	
紀要編集制作費	70,000	70,000	70,000	
チラシ制作費	50,000	30,000	50,000	
機関誌刊行費支出	1,000,000	1,200,000	1,450,000	
印刷費支出	670,000	739,610	650,000	
絵本学会ニュース	200,000	207,900	200,000	
研究紀要	250,000	290,000	250,000	
会員名簿	20,000	83,160	0	
その他	200,000	158,550	200,000	
消耗品費支出	20,000	1,0204	20,000	事務消耗品費
通信費支出	400,000	237,640	400,000	ニュース等発送費・通信費
報酬支出	300,000	199,062	300,000	
事務局報酬	300,000	199,062	300,000	事務局１名＋アルバイト
会議費	20,000	46,550	30,000	
雑費	20,000	15,415	20,000	
予備費	80,000	0	50,000	
10周年記念事業積立金	1,200,000	1,400,000	1,200,000	前年度は機関誌刊行積立金
次年度繰越金	55,768	902,763	422,793	
合計	5,025,768	6,163,450	5,902,793	

（単位：円）

「書評」にこたえる

本学会機関誌『BOOK END』2号に掲載された書評（「子どもはどのように本を読むのか」）に対し、当該書の著者（監訳者）である谷本誠剛氏より、反論が寄せられました。次号『BOOK END』に掲載するのでは間があき過ぎますので、本ニュースに載せることに致しました。

本紙がこうした議論の場となり、様々な意見交換の場となることは有益であると考えます。　（広報委員会）

●時代が絵本を作り、絵本が時代を作る
―『子どもはどのように絵本を読むのか』の書評を批判する

谷本誠剛

『ブックエンド』第二号（絵本学会発行、フィルムアート社発売）に載った正置友子氏による『子どもはどのように絵本を読むのか』（柏書房）の書評は、一見大所高所にたった正論に見えるかもしれない。しかし、ポストモダンな現代絵本が出現すること自体の現代という時代の意味を理解せず、古い価値観に立って大上段から裁断した感のある書評は、突き詰めると虚しい大言壮語なのではないか。そもそもイギリスという国の特殊な教育事情に基づくこの本は翻訳に値しないものであり、訳者がつけたイントロダクションは読者を混乱させるだけだし、中身の論文にしてもそれほどのものではないという書評を読むと、未見の人はこれをトンデモナイ本と思われるかもしれない。書評者は「読者は霧の中に迷い込み、もやもやの状態のままで本を閉じる」と述べてもいるが、これは正直な感想だろう。なぜそういうことになるのかを含めて、いささかの反論を試みたい。

『子どもはどのように絵本を読むのか』は、現場からのリポートを中心にしている。現場とは、識字教育にかかわるイギリスの初等教育の場である。書評者もいうとおりに、また前書きや訳者による注にも詳しく述べているように、国語の読本ではなく実物の絵本を教材にするという実践がそこではなされている。同時にこの現場には、「テクストの意味は読者が作る」という現代的な考え方があり、子どもの「読み」が形成される様をねばり強く追う現場である。いま流行りの言葉でいえば、ここではパフォーマテイブな読みの実践がなされているのだ。個々の子どもの読みがあり、それが相互干渉しあって一つの場の読みにまとまるとする考え方は、作品の読み方に何か普遍的なものがあることをあらかじめ前提としない。ここは、普遍的と考えられる価値観を上から押しつける旧来のタイプの教育の場ではないのである。

『子どもはどのように絵本を読むのか』がもっぱら扱うのは、ジョン・バーニンガムやアンソニー・ブラウンなどのポストモダンな絵本である。彼らの絵本には従来の絵本とは違ってしばしば意味が多義的で曖昧で、一定の意味に収斂することがない。細部に過剰にこだわったり、絵本を作ること自体に自意識的であったりもする。そういう作品が出てきたことと、「テクストの意味は読者が作る」という考え方は一体である。どちらが先ともいえないのだ。そういう現代の絵本観にたって実践がなされていることを読み違えてはならないだろう。時代の変化とともに絵本そのものが変わってきたのであり、そこでは書評者の主張する「絵本史の地道な書誌的研究」がもはや有効ではなくなったという事情があるのである。

『子どもはどのように絵本を読むのか』は、イギリスでの児童文学の批評研究を紹介する「子どもと本」という叢書のなかの一冊である。全体に堅い内容のシリーズであるから、出来るだけ読者に近づきやすいように工夫されている。監訳者による「現代絵本と子ども読者」というイントロダクションをおいたのもその一つである。ここでは、この本が扱うのがもっぱらポストモダンな絵本である以上、そもそもポストモダンな絵本とは何かということを従来型の絵本と対比することから始めている。ついで主体的できわめて知的でもある子どもの読みの実態にふれ、そのことがポストモダンな絵本のありかたと直接結びつくことを云おうとしている。「スキゾキッド」といわれる子どもというポストモダンな存在が、ポストモダンな絵本を創るということである。最後に述べた「読むことから創ることへ」は、現代の教育の最大の関心事であり、この本の著者たちの基本姿勢である。

監訳者によるイントロダクションは全体としてこの本のなかの論文についてあらかじめ解説することを意図しており、識字教育にかかわるイギリス的な事情にもふれている。その知識がないとやはりこの本にある論は読みづらいからである。書評者はこのイントロダクションがかえって読者を混乱させるという。ここのところが何度読んでも正直分からない。イントロダクションについては、我が国でポストモダン絵本を正面から解説したのはこれが最初だという反応もいただいている。読者に判断してもらうしかないのだろう。各論の導入部を新しくしたことも読者を迷わせる原因だとしているが、しかし論文ないしはエッセイの本体は一切省略せずに完訳しているのだから、これもなぜ問題なのか分からない。また表紙の絵が変わっていることは事実だが、これはシリーズ全体の表紙を統一したためである。書評という社会的責任を負う作業では、押さえて欲しい基本だ。

繰り返すと、現代という時代がポストモダンないしはハイモダンな絵本を作ったのである。大衆化し、相互に相容れない価値観が併存する多様な価値観の時代には、文学や絵本に対する見方や批評もまた変わらざるをえない。本書の冒頭にあるデイビッド・ルイスの論が絵本とはいかに自由な実験が可能なメディアであるかをいうことは、一昔まえの絵本観とはっきりと異なっている。現代絵本の元祖の

位置にあるセンダックの子ども観は画期的なものであったが、これも時代が作らせたものであり、ノーデルマンの精緻をきわめる絵本論も、現代の批評理論のなかで生まれてきたものである。こういうことを前提にするこの本の著者たちの実践の報告は、訳者たちには十分驚くべきことであった。しかし、書評者はここにあるような子どもの反応は読書会でもやればすぐに分かることだという。しかし、そういう感想と子どもの実態にねばり強く目をこらす実践報告とはおのずと別である。日本では理論を踏まえた子どもの絵本の読み方に関する実践論はまだ一冊も書かれていない。

また、書評者はルイスやノーデルマン、センダックの絵本論は大したものではなく、ノーデルマンの絵本論では日本の絵本（例えば、長新太あたりがそうだ）をカバーできないという。後者はそのとおりだが、しかしそういう大所高所論の前にまずは対象とする本の中身に誠実につきあって欲しかったというのが感想である。そしていま激変している文学研究の場のありようなどにも思いを馳せてほしかった。時代に生きるものの責務であると考えるからである。あえて多様な「声」を併存させるこの本は、簡単には一つの意味に収斂しないものではあるだろう。しかしこの本が前提とする時代的な意味を把握すれば（それはイントロダクションに書いてあることだ）、そうそう「霧のなかに迷う」ことはなかったはずである。

付記すると、この本は新しい考え方の本だからきっと分かってもらいにくいでしょうという感想も別にもらっている。ポストモダンや脱構築（意味の構築と解体を同時に行うこと）の理論は読者には馴染みにくいのである。しかし、現にそういう絵本が現れ、主流となり、おそらく母親たちの感想とは別に、子ども自身は大いに面白がっているということがある。またグローバリズムの流れは確実に日本も取り込みつつあり、同じ絵本を読んでも国籍の異なる子どもの読みは当然異なっている。こういう時代には長新太の絵本をアフリカの子どもが読んだらと考えてみることは面白いことである。本書を通して多文化の共存するイギリスの事情を知ることが、固着しがちな考え方の殻をやぶるきっかけとなればと思う。絵本を知的にとらえ、知的認識のツールともみなす絵本観も、もとより新しいものである。（この文章には共訳者との意見交換に基づくところがあることを感謝とともに伝えます。）

絵本関係イベント案内

●WAVE in TOKYO

2004年こどもの本WAVE大きな波を起こそうin東京

時　2004年9月26日（日）10:00～16:00

所　国立オリンピック記念青少年総合センター
　　国際会議室
　（小田急線 参宮橋、千代田線 代々木公園　徒歩7分）

参加費　大人 1,000円　こども 無料

問合せ　こどもの本WAVE事務局
　Tel&Fax03-3633-8548、 home@kodomonohonwave.com

主な内容

・紙芝居　紙芝居を演じる会 ひょうしぎ
・「読みがたりのすすめ」小松崎進（この本だいすきの会代表）
・対談「いまこそWAVEを」太田大八 vs 灰谷健次郎
・こども対象ＷＳ　和歌山静子＋多田ヒロシ
・「文庫活動から-ことばをたのしむ-」
　広瀬恒子（親子読書地域文庫全国連絡会代表）
　地元にて活動している方々の実演・活動紹介
・絵本作家読み語り　飯野和好

●絵本学会主催　絵本研究講座

絵本の時間表現

日時　2004年12月11日（土）午後1時～4時

会場　日本児童教育専門学校
　　東京都新宿区高田馬場1-32-15
　　JR山手線高田馬場駅徒歩3分　tel.03(3207)5311

定員　100名

参加費　一般1000円　絵本学会会員・学生500円

出演　岡崎乾二郎（画家・絵本作家）　福永信（小説家・絵本作家）　中川素子（文教大学教授・絵本学会理事　コーディネーター）

申込み・問合せ　11月26日（金）までに世田谷文学館学芸部・生田あてtelまたはfaxでお申し込みください。申し込みは先着順。

tel.03(5374)9112　fax.03(5374)9120

●2005年ＩＲＳＣＬ日本支部研究発表交流会

国際児童文学学会（ＩＲＳＣＬ）の2007年度大会が2007年夏に京都国際会館で開催されます。それに先立ち2005年春にＩＲＳＣＬの理事会メンバーが本大会準備のため来日することになり、研究発表交流会を開催することになりました。国際的に活躍する児童文学者たちの最新の研究に触れる機会を広く提供するとともに、日本の研究者の研究成果を世界に発信する場になることが、この会の目的です。研究発表交流会に参加ご希望の方、また研究発表を希望される方は、web siteをごらんください。

http://www.irscl.info/2005precongress.htm

絵本関係展覧会案内

●軽井沢絵本の森美術館
〒389-0111　長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1
TEL.0267-48-3340　FAX. 0267-48-2006
http://www.museen.org/ehon/
info@museen.org
★「ドイツの子どもの本展＝森から生まれたメルヒェンの源流を求めて＝」
会期：2004年9月1日（木）～10月11日（月）
森に抱かれた国、ドイツ。メルヒェンが産声をあげた瞬間から現在まで、この国が森とともに育んだ本の魅力を探ります。
＜展示内容＞
・伝承メルヒェン：グリム童話
・ドイツの子どもの本の歴史
・創作メルヒェン
・ドイツの絵本作家
・1990年代から現在までの絵本
・ミュンヘン国際児童図書館
＜出品作品＞
☆原画
ヤーノシュ「サーカスのうさぎ」（1982年）
フックスフーバー「ハーメルンの笛吹き」（1984年）ほか
☆本
アルニムとブレンターノ編『少年の魔法の角笛』（1808）
ブッシュ『マックスとモーリッツ』（1908年ごろ）ほか
作品点数：約150点
★特集「グリム童話を旅する」
会期：同上
「いばらひめ」「ヘンゼルとグレーテル」など、グリム童話の原画と絵本７０点を展示します。
作品点数：約70点
★「愛の絵本展＝家族、友だち、恋・・・描かれた愛の形をめぐって＝」
会期：2004年10月15日（木）～2005年1月16日（日）

●エルツおもちゃ博物館
〒389-0111　長野県北佐久郡軽井沢町塩沢182-1
電話0267(48)3340　fax.0267(48)2006
info@museen.org
★「楽しく学べるおもちゃ展」
～“色・形・素材”に流れるフレーベルの系譜～
会期：2004年7月1日（木）～10月11日（月）
幼稚園の創始者としても有名なドイツの教育学者フレーベルは現在の積木の原型となった「恩物（おんぶつ）」と呼ばれるおもちゃを作り出しました。今展ではフレーベルに始まった子どもにとって良質なおもちゃの数々を、教育学者の理論とともにご紹介いたします。
また、フレーベルの精神を受け継いだドイツ・デュシマ社についても特集します。その他、おもちゃとそれを取り巻く時代や環境にもスポットを当てた展示を行います。
＜主な展示作品＞
・フレーベルと教育学者のおもちゃ
・フレーベルの精神を受継いでつくられているおもちゃ
・五感を育むおもちゃ
・生活を学ぶおもちゃ
・創造性を育むおもちゃ
＜展示点数＞およそ120点
★併設展：エルツおもちゃのあゆみ
Ａ展示室―「１００年前につくられたおもちゃ」
Ｂ展示室―「エルツおもちゃのあゆみ」
Ｃ展示室―『楽しく学べるおもちゃ展』
★クリスマスの聖なるおもちゃを訪ねて
―光とキャンドルへの憧れ―
会期：2004年10月15日（木）～2005年1月16日（日）

●大島町絵本館
〒939-0283　富山県射水郡大島町鳥取50
TEL : 0766-52-6780　FAX : 0766-52-6777
http://www.iijnet.or.jp/ehonkan/
★「アジアの絵本」原画展
展示原画
・韓国・朝鮮の昔話『おどりトラ』金森襄作／再話チョンスクヒャン画　福音館書店
・中国の昔話『ナージャとりゅうおう』東亜明文・于大武画　講談社
会期　～9月29日（水）

●ちひろ美術館・東京
〒177-0042　東京都練馬区下石神井4-7-2
TEL 03-3995-0612 ／ テレフォンガイド 03-3995-0820
FAX 03-3995-0680　http://www.chihiro.jp/tokyo/
★没後30年特別展　私が選んだちひろ展
9月15日（水）～11月28日（日）
★山田洋次セレクション.シネマ倶楽部　第３期
シネマ倶楽部会員100名を募集し、映画監督山田洋次が選んだ映画作品の上映（4回）と、監督自身が映画を語る講演会（2回）を開催します。
・開催期間 ： 10月2日（土）～10月30日（土）
・会場 ： ちひろ美術館・東京　多目的展示ホール
・講演予定日 ： 10月2日(土)・10月24日(日)
(上映会終了後に開催)
・上映日及び上映作品 (午後2時半より上映予定)
10月2日（土）
『暗黒街の顔役』（1932年アメリカ）
10月9日（土）
『無防備都市』（1945年イタリア）
10月24日(日)
『きみの名は』（1953年日本）
10月30日(土)
『アイリス』（2001年イギリス）
・応募受付 ： 8月20日より（定員になり次第締切り）

●安曇野ちひろ美術館
〒399-8501 長野県北安曇郡松川村西原
TEL. 0261-62-0772／テレフォンガイド 0261-62-0777
FAX 0261-62-0774
http://www.chihiro.jp/azumino/top.htm
★＜ちひろの仕事＞
没後30周年特別展　わたしが選んだちひろ展
★＜ちひろの人生＞初期素描／スケッチ展Ⅳ
★＜企画展＞知られざる絵本大国・ロシア
9月17日(金)－11月30日(火)

●世田谷文学館
〒157-0062 世田谷区南烏山1-10-10
TEL03-5374-9111　FAX03-5374-9120
http://www.setabun.or.jp/
★佐野洋子　絵本の世界展
会期：7月17日（土）～9月20日（月．祝）
開館時間：午前10時～午後6時（入館は5時30分）
休館日：毎週月曜日（祝日は開館、翌日休館）
『100万回生きたねこ』『だってだってのおばあさん』など、多くの読者の支持を得る絵本でお馴染みの佐野洋子。のびやかな線と暖かな色彩、人間に対する尽きない好奇心にあふれた絵本の世界を紹介する企画展を開催。
本展では、佐野洋子の代表的な絵本作品の原画や関連資料約150点を展示するほか、作者の図書を閲覧できるコーナー、トーク＆サイン会、ギャラリートークと佐野洋子の絵本世界を多面的にご紹介します。
【展示作品】
〈原画展示作品〉
・『おじさんのかさ』（講談社刊）
・『わたしのぼうし』（ポプラ社刊）
・『100万回生きたねこ』（講談社刊）
・『空とぶライオン』（講談社刊）
・『だってだってのおばあさん』（フレーベル館刊）
・『ねえ　とうさん』（小学館刊）
〈参考展示作品〉
・『うまれてきた子ども』（ポプラ社刊）
・『ちょっとまって』（福音館書店刊）
・『かってなくま』（偕成社刊）
〈その他〉
『わたしのぼうし』のモチーフとなった写真、絵本のダミー、挿絵のエッチングほか
★企画展　生誕120年　詩人画家・竹久夢二展
10月9日（土）～11月28日（日）

●イルフ童画館
〒394-0027 長野県岡谷市中央町2-2-1
TEL 0266-24-3319(ミミズク)　FAX 0266-21-1620
http://www.ilf.jp
★成長絵本【おともだち原画展】　～童画家たちの挑戦～
戦後間もない昭和22年。子どもたちのために創刊された絵雑誌『おともだち』原画展
第Ⅰ期：2004年8月20日（金）～10月19日（火）
第Ⅱ期：2004年10月22日（金）～12月21日（水）
※最終日は17:00閉館
◎出展作家
井口文秀／上田次郎／大沢昌助／川上四郎／川島はるよ
河目悌二／川本哲夫／木俣武／久保雅勇／黒崎義介／沢井一三郎／杉全直／鈴木寿雄／武井武雄／立野道正
田中良／初山滋／林義雄／伏石繁雄／茂田井武／
安泰／吉澤廉三郎　他

●巡回絵本展　世界のバリアフリー絵本展
PICTURE BOOKS FOR ALL！
主催：日本国際児童図書評議会（JBBY）
　　日本ユニセフ協会
後援：絵本学会
全体問合せ先：世界のバリアフリー絵本展実行委員会
　　tel.042-566-5403（かくあげ方）
◎会場の感想より
・本を「読む・見る・感じる」そのことは誰もが持っていたい大切な宝物だと思いました。
・世界にはこんなにたくさんのバリアフリー絵本があるのだと驚きました。どんな人でもみんながこの素敵な絵本の世界を楽しむことが出来たらと思います。日本でももっと手話や点字がついているもの、わかりやすく作られている本普通に買えるような動きが出てきたらなあと思います。絵本を読む権利は全ての人に与えられているものだと思うので・・・。
・皆が楽しめる絵本ですね。障害を持つ人とそうでない人の境のない本、だけど少しだけ障害を持つ人のために優しく丁寧な本です。どれにも愛がこもっている。私も聴力が弱く、視覚から入っていくのでとても感動した。まだ自分にもたくさんの機能があることを感じました。いいものを知れたと思います。
・PIC（ピクトグラム）を見て感動しました。子どもからお年寄りまで、様々な障害を持つ子どもが使えるユニバーサルデザインだと思いました。
・ピクトグラムという略絵が絵本の中に入れてあるのは、簡単に理解でき、知的障害者もですが、高齢者にとっても優しい本だと思いました。
・手話つきの絵本は始めてみました。普通の本屋さんでこれらの本が並ぶ日が来ると良いなあと思います。
・布の絵本・触れてみる絵本・手話の絵本・においの絵本・音の出る絵本みなすばらしい！本を通じ言葉や心を伝える手法がこれだけ工夫されているのかと絵本を作られる方に頭が下がります。
・自閉症やADHDの本はわかりやすく、学校などの図書館にあると良いのでは・・・
・孫が全盲で生まれました。自分に何が出来るのかとずっと考えていました。今日はとても参考になりました。
・おもしろかったよ。たのしかったし、すごくたのしかったしずっとみてたかった。

・ぬのの本がおもしろかった！かみの本はきらい。

＜北海道北広島市＞
[日時]　9月21日（火）～26日（日）10:00～18：00
最終日は15：00まで
[場所]　北広島市芸術文化ホールギャラリー
〒061-1121　北海道北広島市中央６丁目２－１
最寄り駅　ＪＲ北広島駅　徒歩１分
[連絡先]　北広島市図書館フィールドネット
（北広島市図書館）蛯名優子
tel.011-373-7667 fax.011-373-6664

＜島根県大田市立図書館＞
[日時]　10月1日（金）～14日（木）
休館日10月5日、12日（火曜日）
開館　平日10：00～19：00　土日10：00～18：00
[場所]　大田市立図書館
〒694-0064　島根県大田市大田町大田イ113-2番地
最寄り駅　ＪＲ大田市駅　徒歩15分（車5分）
[連絡先]　大田地区子ども読書推進ボランティアネットワーク（大田市立図書館）　有馬
tel.0854-84-9200 fax.0854-84--9202

＜島根県仁摩町＞
[日時]　10月16日（土）～29日（金）
休館日　10月19日・26日（火）
開館時間　10：00～16：00
[場所]　仁摩町生涯学習センター
〒699-2301　島根県邇摩郡仁摩町大字仁万町565-1
最寄り駅　山陰本線仁万駅　徒歩１０分
[連絡先]　仁摩町教育委員会　　高倉秀雄
tel.0854-88-4646　fax.0854-88-4647

＜鳴門市立図書館＞
[日時]　11月3日（水）～7日（日）
開館時間　9：00～17：30　木・金　9：00～18：30
[場所]　鳴門市立図書館
〒772-0011徳島県鳴門市撫養町大桑島字蛭子山　49番地
最寄り駅ＪＲ鳴門駅徒歩 20分
鳴門市営バス鳴門市立図書館前下車徒歩1分
[連絡先]　特定非営利活動法人「ふくろうの森」
林由香・有井公代
tel.&fax.088-685-0389
岩田美津子講演会
日時：平成16年11月7日（日）午後1時30分～3時
場所：鳴門市立図書館２階視聴覚室

＜実践女子短期大学＞
[日時]　11月13日（土）～14日（日）10：00～16：00
[場所]　　実践女子短期大学
〒191-0016 東京都日野市神明１－13－1
最寄り駅　ＪＲ中央線日野駅　徒歩１2分
[連絡先]　実践女子短期大学バリアフリー絵本展実行委員会　生活福祉学科　西脇智子
tel. 042-584-5433　fax.042-584-5447

＜静岡県福田町立図書館＞
[日時]　11月24日（水）～12月5日（日）
休館日　11月29・30日
開館時間　10：00～18：00
[場所]　福田町立図書館
〒437-1203　静岡県磐田郡福田町福田1552-1
最寄り駅　JR磐田駅　バス福田行き「天竜社前」下車徒歩3分
[連絡先]　福田町立図書館
tel. 0538-58-3300　fax. 0538-59-1911

＜愛知県春日井市図書館＞
[日時]　12月9日（木）～19日（日）
休館日12月13日（月曜日）
開館時間　9：00～20：00　最終日は17：00まで
[場所]　春日井市図書館
〒486-0844愛知県春日井市鳥居松町5丁目44番地
最寄り駅　JR中央線春日井駅　徒歩15分
名鉄バス「鳥居松」「春日井市役所前」下車徒歩 1分
[連絡先]　春日井市図書館　西尾千賀子
tel. 0568-85-6800　fax. 0568-82-0213

＜日本ユニセフ協会岩手県支部＞
[日時]　12月22日（水）～26日（日）
[場所]　盛岡市プラザおでって2Fギャラリー
〒020-0871岩手県盛岡市中ノ橋通１－１－１０
最寄り駅　JR盛岡駅　車10分
[連絡先]　日本ユニセフ協会岩手県支部　藤原綾子
tel. 019-687-4491

事務局からのお知らせ

●第８回大会（2005年度）の開催について

第８回絵本学会大会は、2005年6月11日（土）～12日（日）の日程で、京都造形芸術大学（京都市左京区北白川瓜生山2-116）において開催することが決まりました。プログラム等詳細は、次号のニュースでお知らせ致します。

●研究助成再募集について

前号ニュースで、絵本研究に関する研究会などグループ活動を援助する助成金について募集しましたが、応募は１件だけでした。この１件は承認されましたが、全３件までを予定していましたので、残り２件分について再募集することになりました。

一件あたり30,000円を助成します。助成を希望するグループは、研究テーマ・研究の概要・研究代表者および構成員・発表の形態を明記し、2004年10月20日（水）までに（必着）絵本学会事務局宛に郵送してください。結果は、運営委員会・理事会で審査の上お知らせします。

●『BOOK END』の販売について

機関誌『BOOKEND』のプレ創刊号および創刊号の残部をフィルムアート社より事務局が引き取りました。これの活用については運営員会で検討中ですが、会員の方でご希望があれば定価の半額でお分けします。プレ創刊号700円、創刊号600円です。複数部でかまいませんので、ご希望の方は事務局までご連絡下さい。

会員以外の方は定価販売です。また、先頃発刊の第２号については、上記扱いを致しません。

●会員名簿の訂正について

『会員名簿2004』の記載内容について新たに次の様な訂正があります。それぞれご訂正方よろしくお願いいたします。

●運営委員会・理事会

5月23日（日）　運営委員会
於：日本女子大学6号館3階会議室
議題

1．前回記録の確認
　一部訂正の上承認
2．第7回絵本学会長崎大会について
　プログラム他の確認、検討
3．2004年度活動計画について
　「絵本学会2004年度活動計画」資料をもとに検討
4．第７回絵本学会総会について
　1）進行スケジュール、役割分担
　総会のスケジュールの確認。
　議長書記候補、各報告者等の役割分担を決定
　2）2003年度活動報告
　「絵本学会2003年度活動報告」資料の検討、承認
　3）2003年度決算
　「2003年度決算書（案）」
　4）2004年度予算
　「2004年度予算（案）」資料に基づき検討
5．2005年度大会について
　2005年度第8回絵本学会大会は京都造形大学で開催されることが了承された。日程は、6月11日－12日。
6．機関誌『BOOK END』2号について
　1）『BOOK　END』第２号刊行の進捗状況、出来上がり予定等の報告。
　2）「BOOK　END第2号の製作費　会計経過報告書」資料により、第2号刊行に係る会計報告
　発行は3000部、学会分は600部と報告。
　2）機関誌発行の今後について
　フィルムアート社との契約の確認の必要、今後の発行形態の検討。3号の刊行については、継続審議。今年度予算計上を決定。
7．会則検討について
　三宅興子会則検討委員会委員長より提出された報告書をもとに会則の検討について意見交換。大筋において今会則検討委員会の原案を了承。
　今後のスケジュールは、まず答申を総会に報告、会員より意見を求める。さらに新しい会則検討委員会を設けて検討し、次年度総会で決定することとした。
8．専門委員会報告
　研究委員会
　「研究用語について」、大会で口頭発表の予定。
　広報委員会
　ニュース21号の発行について
9．次回運営委員会の開催日程について

次回は7月19日（月）、日本女子大学で行うこと。

6月12日（土）　理事会・運営委員会合同会議
於：活水女子大学本館1階会議室
議題
1. 第７回絵本学会大会について
大会実施に係る最終確認。
2. 『BOOK END』について
機関誌編集委員長より検討依頼のあった下記について検討。
1）フィルムアート社との取り決めに関する件。
今号はこれまでの「覚え書」に即して進める。
次号以降は、正規の契約書によること。
2）今号の編集費に関する件
編集費をフィルムアート社で負担のこと。
3）プレ創刊ならびに創刊号引き取りの件。
残部は引き取ってこちらで活用すること。

7月19日（月）　運営委員会
（以下の議事について会議。子細は次号ニュースに掲載します）
於：日本女子大学６号館３階会議室
議題
1. 前回議事録確認
2. 第７回 絵本学会長崎大会について
実行委員会報告
反省感想など
3. 機関誌『BOOK END』について
2号の報告
次号について
これまでの号の扱いについて
4. 専門委員会の活動について
研究委員会
企画委員会
紀要編集委員会
広報委員会
5. 「絵本学文献」の収録範囲について
6. 研究助成について
7. 会則改定の進め方について
8. 2005年度大会について
9. その他
次回運営委員会の開催日程について